2023 vol. 09

じんるいけん Booklet

ISSN 2434-9658

公開シンポジウム（後藤明教授退職記念）講演録

後藤明の研究の歩みと四人の巨人

南山大学人類学研究所 編

南山大学人類学研究所
Anthropological Institute, Nanzan University

じんるいけんBooklet vol.9

南山大学人類学研究所
公開シンポジウム（後藤明教授退職記念）講演録

後藤明の研究の歩みと四人の巨人

南山大学人類学研究所
Anthropological Institute, Nanzan University

はじめに

宮脇千絵（南山大学人類学研究所・准教授／第一種研究所員）

本ブックレットは、2023 年 3 月 11 日に開催された南山大学人類学研究所研究所 2022 年度第 2 回公開シンポジウム「後藤明先生の研究の歩みと四人の巨人（後藤明教授退職記念）」の講演録である。

後藤明先生は、2010 から 2022 年度にかけて人類学研究所の第二種研究所員であり、特に 2010 から 2017 年度の間は所長として、その活動を支え活性化に尽力されてきた。人文学部人類文化学科の教員との兼務はご苦労の連続だったに違いない。そのような先生のご退職を記念し企画されたのが本シンポジウムである。

シンポジウムの概要およびプログラムは次のとおりである。

2022 年度第 2 回公開シンポジウム
「後藤明先生の研究の歩みと四人の巨人」（後藤明教授退職記念）
日時：2023 年 3 月 11 日（土）、13：30 ～ 17：30
会場：南山大学 Q 棟 104 教室　および　オンライン（Zoom）
主催：人類学研究所
共催：人文学部人類文化学科、人間文化研究科人類学専攻、中部人類学談話会
プログラム：
・「挨拶・趣旨説明」　渡部森哉（南山大学人類学研究所）
・「学問上の四人の「巨人」」　後藤明（南山大学人文学部人類文化学科／人類学研究所）
・「北方研究の立場から」　大西秀之（同志社女子大学）
・「物質文化研究の立場から」　角南聡一郎（神奈川大学）
・「オセアニア考古学の立場から」　石村智（東京文化財研究所）
・討論

当日はハイブリッドで開催し、対面およびオンライン合わせて約 90 名の方々にお集まりいただいた。新型コロナウイルスの影響が続くなかの開催ではあったが、懇親会に

も多くの方にご参加いただいた。

なお後藤先生は退職後の 2023 年度以降、人類学研究所の特任研究員として、引き続き研究に専念しておられる。

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・宮脇 千絵　i

挨拶・趣旨説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・渡部 森哉　01

講演１　学問上の四人の「巨人」・・・・・・・・・・・後藤 明　05

講演２　北方研究の立場から―日本人類学にとっての北方研究―
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大西 秀之　35

講演３　物質文化研究の立場から・・・・・・・・角南 聡一郎　51

講演４　オセアニア考古学の立場から―世界遺産「タプタプアテア」と
篠遠喜彦―・・・・・・・・・・・・・・・・・石村 智　59

総合討論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　69

挨拶・趣旨説明

渡部森哉
（南山大学・教授/人類学研究所・所長）

後藤明先生は、2007 年 4 月からこれまで南山大学の教授を務められました。後藤先生のご業績、大学への貢献は多大なるもので、とりわけ 2010 年 4 月から 8 年間所長を務められた人類学研究所については、その現在の基礎をつくられた方です。

今回のシンポジウムは人類学研究所の主催で、先生が所属される人文学部人類文化学科、先生が専攻主任を務められた人間文化研究科大学院人類学専攻、先生が長らく会長を務められた中部人類学談話会との共催の企画となっています。ご退職に当たり、私から後藤先生に、先生の最終講義を含めたイベントが何かできないか相談したところ、一方的な講演会ではなく対話型の講演会・シンポジウムはどうかというご提案を頂きました。そこで、先生の共同研究者の 3 人の先生に声を掛け、本日ご登壇いただくこととなりました。後藤先生、本日はおめでとうございます。

挨拶・趣旨説明　渡部森哉

講演 1

学問上の四人の「巨人」

後藤明
（南山大学・教授/人類学研究所・第二種研究所員）

今日はお忙しい中、私の退職記念シンポジウムに対面あるいはオンラインでご参加いただき、ありがとうございます。距離は関係ありませんが、オンラインでは遠く沖縄やハワイからもご視聴いただいていると聞いています。ありがとうございます。

偶然にも本日3月11日は、東日本大震災から12年がたった日です。私の郷里の仙台の若林区も被災地とされており、仙台に帰省する際は、車で行ければ壊滅した海岸の集落である荒浜集落の慰霊碑に必ずお参りに行っています。そのような日でもあるので、冒頭に短く黙祷をさせていただきます。

今日は私の研究の歩みを中心にお話ししたいと思います。しかし詳しいお話は私の退職記念論集や、ならびにNPO法人ミラツクや法人の喜界島サンゴ礁研究所のインタビュー記事でも既に語っており、印刷あるいはWebの形で見ることができますので、繰り返さないことにします。今日はそれらにあまり載っていなかった内容として、特に自分の歩みに大きな影響を与えた4人の研究者との関わりと、自分の学問的な枠組みとの関連をお話しします。私は彼らを「4人の『巨人』」としています。厳密な定義はありませんが、自分の研究に大きな方向付けを行った人であり、それぞれの分野で今でも参照される理論やデータを提示してくれた人、さらに私がまだ乗り越えられないと感じている人です。全員故人となられましたので、場合によってはやや裏話的な話題も紹介しながらお話しします。

また、今日のパネリストの3人と私は、まず考古学が出発点であること、京都で行った環太平洋神話研究会や、考古学的民族誌研究会、万葉古代学研究所の共同研究、神奈川大学の国際常民プロジェクト、さらには沖縄の海洋文化館にさまざまな形で関わったという共通点があります。

■ 4人の巨人

今日お話しする4人の巨人とは、渡辺仁先生、大林太良先生、篠遠喜彦先生、遠藤庄治先生です。今日は全員を「先生」ではなくて、「さん」付けで呼ばせていただきます。篠遠さんだけ93歳というかなりの高齢までご活躍されましたが、大林さんと遠藤さんは72歳、渡辺さんは79歳で亡くなっておられます。

私はこの4人について、既にそれぞれ何らの形で論評を行っています。渡辺仁さんに関しては、国立民族学博物館の岸上さんが編集した『はじめて学ぶ文化人類学』（岸上（編）2018）でコラムを書いていますし、大林さんに関しては先日アンソ

ロジー（後藤（編）2022）を出す機会があり、私が責任編集を務めました。篠遠さんに関しては、秋道智彌さんと印東道子さんが編集した『ヒトはなぜ海を越えたのか』（秋道・印東（編）2020）という篠遠先生の追悼論集のようなもので先生との出会いについて書きました。遠藤さんについては、沖縄の弟子さんたちがNPO法人沖縄伝承話資料センターから出した追悼論集（NPO法人沖縄伝承話資料センター（編）2006）にも論評を書かせていただきました。

■1人目の巨人・渡辺仁

1人目は、渡辺仁（わたなべひとし）さんです。私が学問を始めたのは東京大学の考古学研究室で、そのときの主任教授が仁（じん）さんでした。仁さんは、理学部人類学科出身であるのに文学部の教授になったという異例の経歴を持っています。仁さんはこのことを宴会のときに何度もおっしゃっていました。

アイヌ・エコシステムの研究で世界的に知られる仁さんですが、若い頃は縄文時代に興味を持ち、『人類學雜誌』（日本人類学会）などに幾つか論稿を書いていました。しかし、そのベースはアイヌ研究でした。アイヌの生活構造には、母村と狩猟キャンプとの併存、男性が狩猟をして女性が採集を行うといった男女の役割分担などがあります。当然、空間利用も男女で異なります。仁さんは、そうしたアイヌの民族事例から、当時の日本の考古学が関心を持たなかったセトルメントの複合的な構造、つまり母村的な遺跡とキャンプ的な遺跡の違いなどを指摘しました。当時の日本の考古学では、一つの地域内の遺跡データを集積し、最大公約数的に地域の特徴を描くことで地方差や時代差を示すという手法が主であったので、仁さんのアプローチはとても画期的だったと思います。

当時、ヨーロッパの旧石器の研究では、同じ時期の異なった石器組成を文化集団の違いとする文化史的なアプローチを取ったフランソワ・ボルドなどの見解と、同時期に存在する異質な石器組成は、機能の違い、つまり母村と動物解体場所などの違いであると主張する生態学・機能的なルイス・ビンフォードの論争が始まっていました。ビンフォードは、そのモデルとして後に北方イヌイットの研究を始めるのですが、実はそれを刺激したのが渡辺仁さんのアイヌ研究であるといわれています。そのきっかけは、1966年にシカゴ大学で行われたMan the Hunter（『人間・狩猟民』）という記念碑的なシンポジウムです（図1）（Lee & DeVore 1968）。2人はそこで同席していて、ビンフォードが仁さんから大きな刺激を受けたらしいのです。その後、

仁さんはビンフォードに招かれ、ニューメキシコ大学で教鞭を執っています。どのような影響を与えたかに関して仁さんはあまり話していませんでしたが、『古代文化』45巻の「土俗考古学の勧め：考古学者の戦略的手段として」（渡辺 1993）という論稿の中には言及していますので、ご覧いただけると分かりやすいと思います。

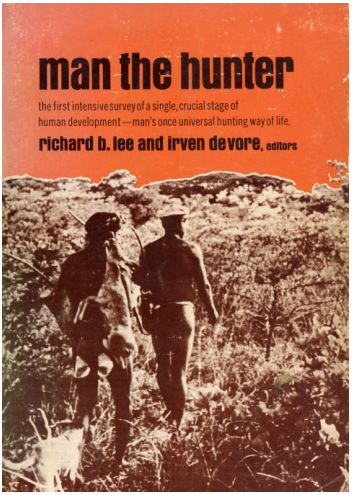


図1

■渡辺ゼミでの学び

仁さんはアイヌのエコシステムに関して居住する川筋の周りにいろいろな生態ゾーンがあり、男女がそれぞれの季節にどのゾーンを利用してどのような活動をしたかというモデルを提唱しています。私が仁さんの考古学概論を大学2年生のときに取った聴講ノートを見ても、その図を書いています。考古学の概論なのですが、アイヌの生活パターンを書いているのです。今だったらパワーポイントを使うでしょうが、1975年にパワーポイントは存在しません。また、この図のコピーが配られていたとしたら、私はノートに貼り付けていると思います。だからおそらく仁さんはこの図をスライド映写機で見せたか、あるいは直接黒板にチョークでこの図を書いて、それを私も一生懸命メモしたのだろうと思います。

私は大学3年生だったとき、考古学の中で海に興味を持ち、卒論や修論では北太平洋の銛頭や釣針で論文を書きました。修士1年生のエスノアーケオロジーという仁さんのゼミで、アイヌ研究をモデルにして北米北西海岸のセトルメントや空間利用、季節移動などについて発表すると、仁さんはとても喜んで、「君、期待しているよ」というような意味のことを言ってくださいました。アイヌのシステムでは母村とキャンプがあり、比較的コンパクトな日本の地形においては、アイヌの人々は基本的に定住します。ところが北西海岸はもっと地形が大きいので、母村、夏の村から集団全体で移動します。つまり、アイヌと気候もよく似ている北西海岸は、サケ・マスなどをベースとした安定的な狩猟採集経済ですが、アイヌの場合は母村があってそこから出て帰ってくる一方、北西海岸は実際に移動することがあるというコントラストがあるのです。北西海岸に興味を持った私がそれについて仁さんのアイヌ・エ

コシステムをまねた表で比較して発表したところ、仁さんは「わが意を得たり」という感じで喜んでくださいました。

私が考古学研究室に進学した直後の3年生のときの最初のテキストは、アメリカの民族学者・オスグッドの *Ingalik Material Culture*（Osgood 1970）でした。考古学の最初のゼミで民族誌を読まされたのです。そのときは意味が分からなかったのですが、これは、誰がいつどれくらいの期間で、どれくらいの頻度で、どこで道具を作るのか、そのときに出るごみ、音、においはどうなのかといったことまで記述している民族誌です。その道具の耐久性、ライフサイクル、修理はどうするのか、どう保持してどう動かすのかということも含まれます。それまでの民族誌は、物質文化は記述して絵を描いて終わりでした。ところがオスグッドの場合は、道具をどう握ってどのように動かすかまで記述しないといけないという考えでした。これはフランス技術人類学のオードリクールやルロワ＝グーランの視点と並行しています。オスグッドの物質文化の記述方法では、外観、名称、製作（材料、組み立て、製作場所、製作時期、製作者）、使用（用途、使用方法、使用における変異、使用場所、使用時期、使用者、使用寿命、所有権）等を記述しなければなりません。例えばナイフも、どのように手に持ってどのように動かすのかまで記述しなければ物質文化の記述は成り立たないということを、私も物質文化の授業で学生に教えるためにオスグッドの民族誌を例として使っていました。

考古学は物質的証拠から人類の生活や進化を論じる学問ですが、物質文化といっても民族誌のそれと考古学史とは似て非なるものです。博物館展示の民族資料はセレクトされたいわゆる名品が多いのですが、遺跡から出てくる遺物は、破損品や製作ごみを含めた雑多品の総体です。考古学者は、そこに何らかのパターンを見いだして過去を推論します。仁さんはこれをよく分かっていて、民族誌や物質文化の研究ができると考古学にすぐ結び付くというような安直な結び付け方は良くないことを教えるためにオスグッドを使ったのだと思います。

さらに、仁さんの考古学概論の中では、「破損品考古学」ということが言われていました。仁さんが日本で石器の研究をしていた当時の考古学者たちは、完形品の石器だけを持って帰っていて、いわゆるフレークのようなものは見ていなかったそうです。しかし、製作全体の体系をやらなくてはいけないと考えていた仁さんは全部持って帰り、破損品やごみも重要であるとしました。このことを言っていたのもオスグッドの *Ingalik Material Culture* なのでつながりがあります。

私の修論のテーマは、北太平洋の釣針でした。仁さんのゼミで割り当てられたラインマン（Reinman）の *Fishing*（Fred M. 1967）というオセアニアの釣針研究などが、私の研究を大きく方向付けました。本当は、篠遠喜彦さんらの書いた *Hawaiian Archaeology : Fishhooks*（Emory(et al) 1959）という本が私に割り当てられていました(図2)。私もこの本の存在は知っていたので読みたかったのです。東大の図書館にあるというので総合図書館に行ったら紛失していたため、結局読めず、最終的には筑波大学にあったコピーを前田潮さんから頂いて熟読し、後にお守りのようにしてハワイ大学に持っていった記憶があります。

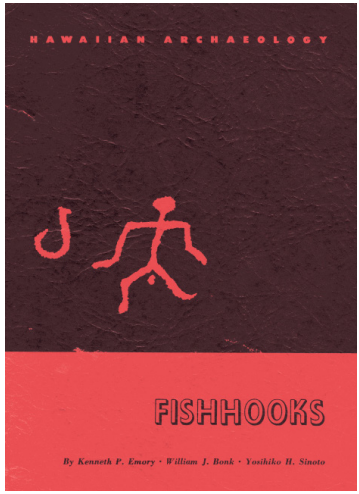


図2

けがの巧妙ですが、そのときに偶然仁さんから割り当てられたのが、ラインマンの *Fishing* です。この本は私の研究人生に影響を与えた本のベスト5に入る本です。そこにはオセアニアのポリネシア人が海という環境に適応するために、どのような生態学的役割が釣針にあったかが書かれていました。この研究をモデルとして私は修論でアリュートやエスキモーや北西海岸インディアンにとって北太平洋の釣針が持つ生態学的意味について書きました。

■渡辺仁の生態人類学

仁さんの真骨頂は生態学であり、アメリカのジュリアン・スチュワードの文化生態学にも近いように見えます。私は3年生ぐらいからスチュワードを読んでいて、「スチュワードの文化生態学とは違うのですか」と仁さんに何度か水を向けたことがあります。しかし、スチュワードの文化の核のモデルを仁さんはマルクス主義的に下部構造と上部構造というような捉え方をしていると理解していたようで、あまり気に入っていなかったようです。

一方、仁さんは「技術と儀礼が対となって自然的側面と超自然的側面に対応する。どちらにもプライオリティーはない」という考え方を取っていて、技術と儀礼は社会を媒介として個人と環境を対応させるものであると考えていたようです。この脈

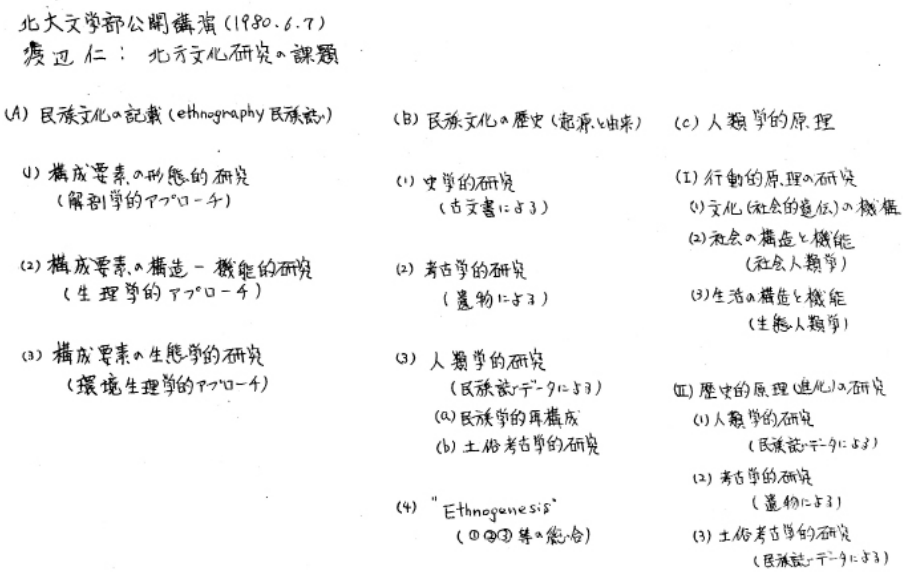


図3

絡で仁さんが評価していたのは、ロンドン大学で教えを受けたであろうダリル・フォードで、*Habitat, Economy and Society*（Forde 1934）という本をいつも勧めていました。最近もう一度これを読んでみたのですが確かに仁さんのアイヌ・エコシステム論とかなり近接する感じがします。

仁さんにとって、生態学と進化学は学問の両輪です。特に仁さんが唱えた生態人類学は、文化人類学や形質人類学、地理学、進化生態学の交差点にあると理解していたようです（図 3）。そして、民族誌でも先史時代の研究でも、常に南北の比較を行って、それを進化論に組み込もうとしていました。アイヌを含めて、世界の諸民族が生態系の一部であることを記述の目的とし、漸移的に変化する諸民族の生態系を並べることで、全体として人類進化の図式が浮かび上がるというスタンスだったと思います。だから、バンド（band）、あるいは父系氏族（clan）や混成氏族など、個々の社会の形成要因を説明しようとするスチュワードの文化生態学とは距離を置いていたように思われます。仁さんは、一つの社会の成立というよりも、それぞれの生態系をグラデーションで並べ、そこに進化の図式が見えてくるといった方法を取っていたと思います。

仁さんのそのような思考方式は、『ヒトはなぜ立ち上がったか』（渡辺 1985）（図 4）や晩年の『縄文式階層化社会』（渡辺 1990）などに見ることができます。仁さんは「私

のことをあっちをやったりこっちをやったりしていて訳が分からないと言う人がいるけれども、私の中には地図がある。いわば囲碁の型のように、まずこの論文はここの布石、次の論文は次の布石と、最後に形を成すという構想があるのだ」とよく語っていました。

仁さんは、何事も構造的に2次元ないし3次元のモデルを提唱して考えることが多い人でした。晩年に『古代文化』に出された「土俗考古学の勧め」という論文に書かれている図式は、仁さんの考えておられたことを考古学などに適用する上で分かりやすいと思います。それは、まず道具系、それを取り囲む活動系、そして生態系があるという考えです。道具系は、釣針と重りやカヌーとパドルのような道具同士の有機的な関係です。活動系は、それらの使用における行動パターンの全体像で、例えば石器なら、完成品だけではなくて石くずも含めて石器製作の全体像と見るような視点です。さらに生態系は、アイヌ・エコシステムのように男女差や年齢差などの異なった行動パターンの中に置いてみる、異なった生態ゾーンを見るというような視点です。

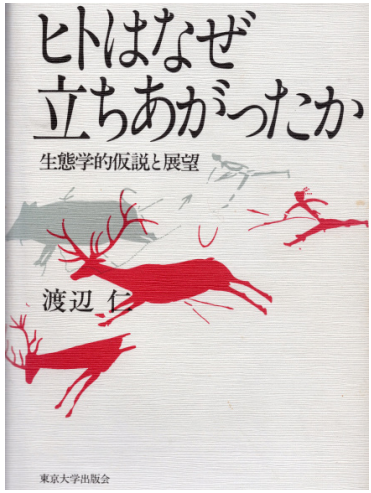


図4

■仁さんの厳しい指導

仁さんのゼミの指導はとても厳しかったです。英語の論文を割り当てられて発表するのですが、読みが甘い部分をことごとく指摘され、同じ論文を3週続けて発表させられることもありました。泣きそうになりましたし、泣いた後輩もいました。あいまいな読みは絶対に許してくれないのです。しかし、仁さんは学生をいじめているのではなく、納得いかないことは徹底的に問いただす指導をしていました。これは相手が学生でもたとえ研究者でも同じだったのです。大学3年生でも決して手加減をしませんでした。これはすごく勉強になりました。

それから、仁さんの前で形容詞や副詞を使うのはご法度でした。私が英文の考古学報告書の発表をしたときです。「1年目の発掘で疑問が出た点を、次の年の発掘でより深く理解できるようになった」と言ったところ、「深くとはどういう意味ですか？

深く掘ったという意味ですか？」と厳しく問いただされました。「深く」という言葉は、「深く掘る」とか「深く潜る」という意味以外では使ってはいけないという人だったのです。仁さんの容赦ない問いは本当に勉強になりました。いまこんなゼミやったらハラスメントと言われそうな気もしますが、私もそのようなゼミを一回やってみたかったです。

仁さんからは「百万言より一つの図、一つの表」と何度も聞かされました。言葉で百万言を言うよりも図を一つ作りなさい、表を一つ作りなさいとたたき込まれました。有志でやっていたニューアーケオロジーの論文を読む読書会の後、先生に来ていただいて喫茶店でコーヒーをごちそうになりながら、「どんな抽象的なことでも、具体的なことから議論しなさい。例えばこの灰皿なら、その大きさ、形、重さから議論しなさい」と助言されました。これも理科系らしい発想かと思います。理系出身の仁さんは「研究者は博士号を取っていないと相手にされない」とも言っていました。想像できないと思いますが、当時、文学部で博士号を取るなどというのはまず考えられませんでした。博士号は、大先生が辞める直前に取る名誉称号のようなものだったのです。しかし仁さんは、「とにかく博士号を取らないと国際学会では相手にされない。就職の相手もしない」という雰囲気で、全く取り付く島もありませんでした。だったらもうアメリカに渡ろうと思い、私はハワイ大学への留学を決意しました。

■ 2 人目の巨人・大林太良

次に、大林太良さんの話をしたいと思います。大林太良といえば、誰しもが神話学の大家と思われるでしょうが、私と大林さんとの出会いは実は考古学でした。私が東大の考古学研究室に入ったとき、選択必修だった東南アジア考古学の講師を大林さんがされていたためです。おそらく当時、東南アジア考古学を講じられる研究者は大林さんぐらいだったと思います。大林さんは『世界考古学体系』アメリカ・オセアニアの巻（石田・泉（編）1959）でもたくさんの章を担当していて、誰も書き手がいない章を一手に引き受けるような人です。この講演では、神話研究ではなく、考古学や物質文化研究の立場から大林さんを振り返ってみます。

大林さんの講義の作法は、そのとき自分が書いていた東南アジア考古学に関する論考の原稿を読んで、学生はひたすらそれを速記するというものでした。清水展さんも「速記の練習になりましたね」と言っていて、大林さんの授業は本当に手が疲

れました。そして、後半になると、「君はどちら？」と聞かれるのです。それは「ドイツ語かフランス語か、どちらかを選びなさい」という意味で、選んだ言語の論文を割り当てられました。私はフランス語で書かれたベトナムの論文を割り当てられ、発表した記憶があります。

図5

私は大林さんには考古学の学生として接したわけですが、その指導法は、広い知識から学生の興味に合わせて、問題をより広いコンテクストで考える示唆を与えてくれるという形でした。大林さんは民族学者でもあり、考古学研究における民族誌の有用性も認めていたので、仁さんの土俗考古学とも通じるものがありました。しかし大林先生の全体像にせまるような論集は意外に少なかったようです（cf. 図５左）（ビオヒストリー編集委員会（編）2007）。私は南山の人類研の論集に、「大林太良の考古学・日本古代史研究」（後藤 2023a）という論稿を書いていますので、参考文献等も参照してください。

大林さんについて驚いたのは、われわれが何を質問しても「それは何年に出た何々の雑誌の、第何巻の、何ページぐらいに出ている」と記憶していたことです。そのように頭の中で膨大な量の文献が整理されていて、ものすごい記憶力と情報整理力をお持ちだったと思います。また、私が留学を決意してハワイ大学へ向かうとき、成田空港で大林さんと奥さま、お嬢さまの３人と偶然出会いました。「ハワイ大学に留学します」と伝えると、「頑張ってください」と力強く両手で手を握ってくれたのを思い出します。先日アンソロジー（後藤（編）2022）（図５右）を出した際、奥さまにごあいさつのお電話をすると、「あのときね。タイに行くときだったのよね･･･」と懐かしがってくれました。

留学から帰った 1988 年以降が、私と大林さんとの出会いの第２期です。そのとき大林さんは欧米のプロセス考古学の論文を読んでいて、私にたびたびコピーを送ってくれました。既に読んでいる論文もありましたが、大林さんからの手紙で初めて

知る論文もあり、とても恥ずかしい思いをした記憶があります。大林さんは、初期の論文では文化と環境との関係、あるいは文化変化は部分的に説明できるとして、マックス・ウェーバーの理念型などを重視し、同時にジュリアン・スチュワードなどにも言及しています。

大林さんが日本考古学に衝撃を与えた縄文時代の社会組織論も、縄文時代には父系に重きを置く双系的な社会があったと推測しています。大林さんも日本の文化領域論や中国や北方の文化複合論などにおいて、生態学的な条件を重視していた点は仁さんと似ていますが、伝播や移動など歴史的な過程を同じ程度に重視したという、仁さんとは異なった人類史を希求していたと思います。仁さんと大林さんの人類進化史あるいは北方文化論は、今後対比していきたいと思います。

■大林の考古学研究

縄文時代や邪馬台国の著作でしばしば日本考古学に衝撃を与えていた大林さんですが、古墳時代についても論稿を書いています。それは水野祐さんの唱えた三王朝交代説を、オランダの古代国家循環崩壊論モデルで再考した論文です。ハワイでも王朝の循環崩壊はたびたび起こっていますので、大林さんとはこのテーマに関して議論のやりとりをした記憶があります。大林さんの論文を参照して自分が書いていた論文や、当時私が植木武さん編集の『国家の形成』（植木（編）1996）に書いていた人口論モデルの論文を送ったときのやりとりなどがあります。

三王朝交代説というのは、崇神王朝、応神王朝、継体王朝という系譜の違った王朝が三つ継続したという説です。崇神というのは最初の支配者で、確実に実在するとされる最初の天皇です。神武天皇から何代目かまでは実在かどうか分かりませんが、大和に王朝を立てた崇神は実在が確実な王朝ということです。応神というのはいわゆる河内王朝ですから、世界遺産になった巨大古墳を河内平野に建てた王朝、継体は日本海側の越前から出てきた王朝です。大林さんはこれを評価して、循環崩壊モデルを当てはめました。

そのときに頂いた大林さん直筆の葉書があります（図6）。大林さんの字は独特で、真偽のほどは定かではありませんが小学館には大林先生の字を解読する専門家がいたそうです。読んでみると、「拝復、お手紙と抜刷を有難うございました。崩壊モデルに賛成してくださり心強く思います。人口について言えば、データがないのですが、崇神のとき、病気で人口の大半が亡くなったことが『古事記』や『日本書紀』にあ

図6

るのは、おそらく何かの事実を反映していると思います。御本をまとめられるよし、大いにたのしみにしています。ただ、六興出版は6月末に倒産しましたが、ぜひ他の出版社ででも出していただきたいと思います」とあります。

リーフレットもあります。「前略　一宮巡詣記をお送りします。12月に風邪をひいたので次回に体裁です。この前お話しした貴兄と秋道君をごちそうする件、1月にいつ東京に来ますか？　お知らせください」。これは大林さんが朝日文化賞を受賞したときのお祝いを秋道智彌さんと二人で行ったときに、お礼にごちそうするからということでした。今でも覚えているのですが、新宿のアフリカ料理店で、秋道さんと私、そして小学館の担当者の水上さんと武田さんと大林さんの五人でアフリカ料理をごちそうになりました（図7）。

■大林の神話研究との出合い

私と大林さんとのお付き合いの第２期、次の柱はやはり神話です。私はハワイ大学から帰ったときに、ハワイ考古学入門のような本の原稿を用意していました。それで、大林さんの朝日賞授賞式のパーティのときに、秋道智彌さんから中公新書の糸魚川さんを紹介していただき、駄目元の気持ちで原稿を読んでいただきました。その頃、私は神話についてはほとんど無知でした。オリジナル原稿はオーソドックスな考古学の本でした。自然や生業や社会を論じた各章の冒頭に、お口直し程度に関連する神話の一部を２～３行書いていました。当時、神話には全然関心もなかったし、知識も断片的でした。すると糸魚川さんから、「神話を中心に書き直していただければ、ぜひうちでも出したい」と言われました。中公新書は高校生以来たくさん読んでいたあこがれのシリーズだったので、天にも上る気持ちで引き受けました。

図7

しかし、神話は見当がつかないので、早速大林さんのご自宅を訪ね相談すると、あっという間に読むべき本を提案していただき、『ハワイ南太平洋の神話』（後藤 1997）という中公新書を１年ぐらいで書き上げることができました。神話研究は今でも私はもぐりだと思っていますが、今日までの著作や講演、あるいはカルチャーセンターなどで依頼される仕事は神話に関するものが一番多いので、大林さんがいなかった

ら今の自分はないと思います。

表や図を重視した仁さんに対し、大林さんが重視したのは分布図で、数多くの分布図を書かれています。一つだけ挙げると、大林さんの晩年の著作『銀河の道・虹の架け橋』(大林 1999) の中に掲載されている図があります。これは「銀河は渡り鳥の道」という神話素の分布です。見ると、一つはロシアの西の方と、北欧のフィンランドやスウェーデンに分布していて、もう一つはアメリカの五大湖の北にあります。

それとは別に、ロシアにベリョーツキンという人がいます。西側とあまりコンタクトができなかったソ連時代、ソ連の学者はひたすら文献で膨大なデータを集めていたのですが、ベリョーツキンもその1人で、何千という神話素を抽出してコンピューターに入れ、検索すると出るようなシステムを作り上げています。彼の論文で示された、「The Pleiades as opening, the Milky Way as the path of birds (昴が天に空いた穴、天の川が鳥の道である)」という神話素の分布を見ると、大林さんの分布とよく似ています。全く別途で世界中の神話を集めた結果、2人の研究者が独立して一致した結論に達しています。

今でこそコンピューターで検索ができますが、少なくとも大林さんは頭のコンピューターでやっていたわけなので、いかにすごいかがよく分かります。ただし、ロシアのあたりは大林さんのデータが少し薄くなっています。大林さんは語学に堪能な人でしたが、唯一ロシア語だけは堪能ではなかったそうです。そのためだと思いますが、ロシアのベリョーツキンの方がデータが少し多くなっています。

大林さんが基礎データ、議論の論拠の提示を引用文献とともに重視したのは、今日取り上げる他の3人の研究者と全く同様です。また、大林さんは北方研究者でもあることは、最後の比較のところでまた振り返りたいと思います。

■ 3人目の巨人・篠遠喜彦

3人目は篠遠喜彦先生です。ホノルルビショップ博物館の元・人類学部長で、オセアニアをやっている人なら誰もが知っている、ポリネシア考古学のパイオニアです。戦前生まれのいわゆる考古ボーイで、戦時中も大陸の考古学に興味を持ち、戦前の混乱した時期に中国大陸に渡るなど、本当に冒険少年だった方です。南山の人類学博物館にも関連する姥山貝塚にも関わっていました。篠遠さんのお父さまは、有名な遺伝学者でICUの学長を務めた篠遠喜人先生です。篠遠家の方針もあって、篠遠

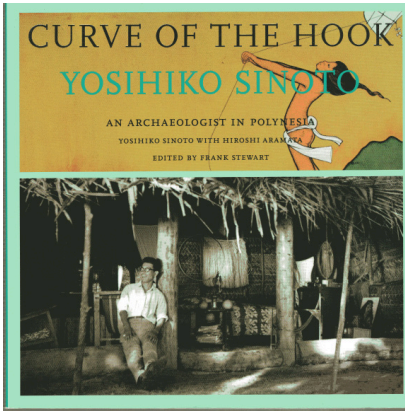


図8

さんは文部省の指導要領から独立した教育がなされている自由学園で学んでいました。おそらくそのために、日本の学校システムでは進学を考えず、最初からアメリカ留学を考えていたと篠遠さんは語っているようです。

篠遠さんは、もともと旧石器時代に興味がありました。戦後、まだ日本では旧石器研究が盛んではありませんでした。旧石器ではなく先土器といわれていた時代のことです。そのときに旧石器をやりたくて、カリフォルニア大学のバークレー校に留学することになりました。そこで船に乗ったら、途中のハワイでビショップ博物館のケネス・エモリー博士に慰留され、「発掘を見に来い」と言われているうちに結局ハワイにとどまることになってしまったというのは有名な話です。その後ポリネシア考古学のパイオニアになったのは、荒俣宏さんとの対談の『楽園考古学』（篠遠 1994）（表紙参照）、あるいはその英訳の *Curve of the Hook*（Sinoto 2016）（図 8）でも語られています。テレビにも何度も登場したので、そちらをご覧になっていただければと思います。私も書評などを頼まれて某新聞に書いたこともあります。

■篠遠さんとの関わり

私自身は釣針の研究をしたかったし、南方へのあこがれもあったので、ハワイで篠遠さんの指導を受けたいと熱望していました。仁さんもそれを勧めてくださり、留学を決意しました。ビショップ博物館にいた篠遠さんには、八幡一郎先生が推薦文を書いてくれ、篠遠さんの伝説的な研究室でお会いできました（図 9）。八幡先生は戦前からミクロネシアの考古学を開拓した方で、篠遠さんとも知己であったと思います。篠遠さんとは 1968 年に東京で行われた太平洋学術会議でシンポジウムを主催し、共著を出したりもしています。

私は、篠遠さんが発掘した 5000 点に及ぶ釣針と 30 遺跡以上の魚骨を自由に分析させてもらい、ビショップ博物館では至福の時を過ごしました。篠遠さんとポリネシアの釣針および編年研究は切り離せないので、私が総合監修をした沖縄の海洋文

図9

化館で、篠遠コーナーを作り、篠遠さんが釣針やポリネシア考古学を語る映像を今でも繰り返して流しています。篠遠さんがポリネシア考古学に果たした役割については、この後石村さんも話してくれると思うのであまり繰り返しませんが、ポリネシア人の新大陸起源説を唱え、コンティキ号の冒険でも有名なトール・ハイエルダールなどとのやりとりの裏話もたくさん聞いています。ハイエルダールは最後まで自分の新大陸起源説を曲げなかったというのですが、実は篠遠さんからは「ハイエルダールは認めなかったけれど、晩年には自分の誤りを分かっていたようだよ」と聞いたこともあります。

私は日本に帰った後も、毎年家族を連れてハワイに行っていました。ハワイの日系移民のお墓の研究をしていたのです。1996 年にアラモアナ・ホテルに泊まっていたときに、アラモアナ・ショッピングセンターの近くに Pacific Book という古本屋があり、そこで偶然 12 ドルで *Hawaiian Archaeology : Fishhooks* の復刻版を買うことができました（図 2）。絶版になっていてハワイ大学にもなく、手に入ると思っていなかったので、「この夜、Dr. Sinoto 夫妻に夕食をごちそうになった」と汚い字でメモを残しています。

『楽園考古学』の英訳本には、マルケサスで発掘をしたときの発掘ノートなどが掲載されています。数日前に国際集会の準備とエクスカージョンでビショップには行ってきたのですが、今、篠遠研究室では、お弟子さんたちがボランティアで篠遠さんの手書きの発掘ノートなどを整理して、データに入れたりスキャンしたりしています。

■公共考古学・実践考古学の先駆者、徹底的証拠主義

篠遠さんは、モアイ像やタヒチの神殿・マラエの復元にも多大な業績を残しています。マラエの復元に当たっては、地主関係も複雑だし、マラエには神聖観念も残っ

ていたので、地元の理解がなかなか最初は得られず大変な苦労をしたそうです。「篠遠が遺跡を造っていると揶揄されたこともあったよ」などと笑っていました。

図10

篠遠さんが成し遂げた考古学の業績の中で、釣針以外で有名なのは、フアヒネ島のカヌーの発掘です。これはホテル建設予定地の湿地から偶然、普通考古学では残らない木製品が出てきました。木製の手斧の柄のほか、カヌーの船体やパドル、垢掻きなどが多数出土しました。これは津波か大嵐で一瞬にして埋没した遺跡のようです。篠遠さんはホースで水を掛けながら発掘を続け、釣針や手斧の刃が埋まっていた状態を記録し、精緻な発掘を行いました（図 10）。例えば釣針や石斧は普通横に寝て出てくるのですが、この遺跡では立って出てきたりします。一瞬にして大嵐に襲われ、しかもその状態が残っているということです。日本の考古学者なら出てきた状態を記録するのは当たり前なのですが、篠遠さんが発掘していたポリネシアではそうではなかったので、大変精密な発掘のモデルとなりました。遺物が出てきた状態からまず記録するという姿勢は、次に述べる遠藤庄治さんが民話を採集するときの姿勢と共通しています。

篠遠さんは、現地ではタヒチ語を駆使して地元の人と一緒に発掘を続けました。地元の女性教師が教え子を連れて参加しているのを見たことがありますし、退職したアメリカ人の方々が多いアースウォッチのグループも発掘を手伝っていました。考古学をパブリックに開き地元に還元するという姿勢を持っていたのです。そして篠遠さんは、遺跡を発掘して復元した後、遺跡観光で地元に利益が下りるようにという考古学観光の構想を持っていました。地元の人が遺跡を管理し、トイレやゲストハウスを作る、要は民泊、村落宿泊のようなものをつくる構想です。当時は公共考古学や実践人類学などがまだあまり話題にならなかった時代です。私は学生時代に篠遠さんのその構想を聞いてとても感動しました。つまり篠遠さんは公共考古学

や実践考古学の先駆者でもあったわけです。発掘、遺跡修復・保存という本来の考古学者の延長で、タヒチ語を駆使し、地元の方々や教員などと連携して進めるという人類学者の役割を地で行っていたのです。この辺の社会貢献に関しては、石村さんの話につながると思います。

篠遠さんは徹底的な証拠主義を貫いていました。一時期話題になったバヌアツで発見された縄文土器の件については、詳しくは荒俣宏との対談『南海文明グランドクルーズ』（篠遠・荒俣 2003）で篠遠さん自身が語っているのでここは割愛します。あのときは東北地方で旧石器の捏造が出た直後でした。旧石器の捏造をスクープしたのは毎日新聞なので、それに対抗したのか、別の新聞社が「バヌアツで出た縄文土器は、実はフランスの博物館のバヌアツのセクションにあった縄文土器だ。あれはもともと慶應大学との資料交換で持っていったものだ」と、さも捏造であるかのように書いたのです。証拠中心主義で、いかがわしいことで名を上げようという人では決してなかった篠遠さんは、とても憤慨し傷ついていました。ただ、バヌアツの発掘に行く前にビショップ博物館で会ったとき、「でも、証明できたら面白いじゃないですか！」と少年にように語っておられました。バヌアツで発掘して、縄文土器が本当に出たら面白いと、純粋に、証拠に基づいて夢を語る方だったのです。

篠遠さんは日本の縄文時代とポリネシアの関係にずっと興味を持っていたし、遠藤さんも同じですので、お二人とも大きな太平洋史を構想していたのは事実です。篠遠さんも遠藤さんも、仁さんや大林さんのように正面を切った人類史のような本は書かれていないのですが、個人的に知っているのでこの機会に言っておきます。

■ 4 人目の巨人・遠藤庄治

最後に取り上げるのは、遠藤庄治さんです。遠藤さんの出身畑は国文学なので、あまり人類学の方では知られていないかもしれません。かくいう私も遠藤さんのことは存じませんでした。遠藤さんとの出会いはある神話研究会でした。そのとき私は、ポリネシアの移住神話や実際に使われていたダブルカヌーや星の航海術について少々話をした記憶があるのですが、遠藤さんが食いついてこられました。コメントで、沖縄の平安座舟という、サバニを平行に並べるダブルカヌー式の船があるということで話しかけてこられて、その後ずっと懇親会でも話し込みました。私は遠藤さんを存じていませんでしたが、その後、沖縄国際大学の教員として学生を指導して、7 万話といわれる沖縄の民話を採集しているすごい人だと知りました。

遠藤さんは私の研究に関心を示してくれて、当時私が勤めていた同志社女子大で行っていた徳之島の調査などに同行したいと言ってくれました。遠藤さんが徹底的な調査をしているのを知っていたので、正直、少し怖気づいていました。その後遠藤さんからの強い申し出もあり、同志社女子大の学生と久米島の調査を2005年に行いました（図11）。

図11

残念ながら翌年、遠藤さんは福島市の日赤病院で亡くなりました。たばこ好きだった遠藤さんは肺がんを患っていたようです。お酒は全く飲まなかったのですが、たばこは大好きでした。私は仙台に帰る途中に福島で途中下車してお見舞いしたのが最後でした。遠藤さん亡き後、弔い合戦として、沖縄本島屋我地島での調査をお弟子さんらと同志社女子大のゼミ生と行いました。屋我地島調査は遠藤さんの遺言でもあったと思い、亡くなった翌年の2006年に行いました。

■「声なき声を記録する」現地主義の調査哲学

遠藤さんが私のような若輩者との調査を熱望したのは、自分の調査のやり方、生きざまを私に見せたかったのだと思っています。その調査は徹底的で、例えば「カセットレコーダーの電池は毎日必ず取り替えよ」と言われていました。それは単なるテクニックではなく、遠藤さんの調査哲学が背景にありました。「調査は一期一会だ。今日聞いた話は次に聞けるとは限らない。だから電池が途中で切れることがあってはならない」。調査者がしばしば高齢であるから今日しか聞けないということもありますが、「調査は毎回の状況に反映される。同じ人が同じ話題を語るのでも毎回同じとは限らない。話者のそのときの気持ち、こちらの態度でも変化する。だから、今日聞けるものは話者の声色まで記録せよ」という姿勢だったのです。だから電池をけちるようなことは、そもそも基本姿勢として間違っているということなのです。要するに、調査は毎回真剣勝負であり、それが話者へのリスペクトでもあるという

ことです。これは遠藤さんから何度も聞いたお話です。

思い出すのは、遠藤さんが自分の政治的スタンスを吐露したことです。私はヤギが好きなので、いつもヤギを食べたいとばかり言っていたら宜野湾のヤギ料理店に連れて行っていただきました。そのときは自分が教えていた沖縄国際大学のキャンパスに米軍ヘリが墜落した2004年で、遠藤さんはそれに対して強い怒りをあらわにしていました。幸い死者は出なかったのですが、米軍は半径何百メートルも包囲して日本の警察を入れませんでした。SFなどでよくある、UFOが墜落するとアメリカ軍が占拠して誰も入れないというのと全く同じことが沖縄で起こったのです。遠藤さんは何か吹っ切れたように自分の政治信条を私に吐露しました。それは、遠藤さんが全学連時代の学生運動に参加していたときの話です。遠藤さんのグループは、確か初代委員長が文化人類学者の千葉大学の教授・中村光男氏でした。これは遠藤さんの調査姿勢、つまり「声なき民衆の声は、それ自体が記録する価値がある」という、話者が言葉を発した瞬間から記録していく姿勢につながると私は思いました。

遠藤さんの調査姿勢を垣間見た別の出来事があります。それは大東島の調査に誘われたときですが、結局飛行機が取れず実現しませんでした。大東島には飛行機しか行き来がないので、冬休みでしたが、島の人が買ってしまっていてチケットを取るのが至難の業でした。大東島は明治時代以降に入植されたので、創世神話のようなものは存在しません。われわれ内地の人間が沖縄の神話に興味を持つのは、今はそれほどナイーブな人はいませんが、例えば『古事記』や『日本書紀』の原型のようなものが沖縄にあるのではないか、参考になるのではないかと考えていたからです。明治時代以降の歴史しかない大東島になぜ行くのだろうかと思ったのですが、そこで遠藤さんの姿勢がよく理解でき、腑に落ちました。「どこであれ、そこで生きた人々の語りこそが大事である。人々の歴史に長短などによる価値の違いはない」というのが遠藤さんのスタンスでした。

また、久米島の調査でご一緒したときに、遠藤さんが巻尺を持っているので驚いたことがあります。巻尺を持つのは考古学者なら当然なのですが、「例えば伝説の石のことを聞いたら、必ずその縦・横・高さを測って、形も記録しておきなさい。そのうち分からなくなるから」ということでした。これには驚きました。民話の研究なのに、巻尺を持っていってとにかく記録しておけというのです。私はこのとき、遠藤さんはまるで考古学をやっているように思いました。

私は遠藤さんの追悼論集で、「ことばの考古学」と称して大林さんの研究方法との

図12

比較を行いました（後藤 2006）。遠藤さんの、偉い人ではなくて声なき民衆の声を記録するということが研究者の使命であるという姿勢は、戦後の日本の考古学者が持っていた使命感とかなり一致します。だから私は、遠藤さんはことばの考古学をされたのだと思っています（図 12）。

上江洲均先生の地元の久米島でも調査を行いました。上江洲先生は、私たちが調査に来ると知っていて泡盛を差し入れてくれて、一度、上江洲先生の家に招かれてごちそうになったこともあります。そこで撮った記念写真には、沖縄研究両巨頭である上江洲先生と遠藤先生に挟まれて小さくなっている私が写っていて、調査に同行した角南さんも少し緊張した顔をしています（図 13）。同志社女子大学の学生には大部屋で寝てもらって、私と角南さんと長谷川慶太郎君という東海大学の学生は、四畳半ほどの小さな部屋で 4 ～ 5 日寝泊まりしていました。

遠藤さんの民話の調査は徹底的な現地主義です。一方、民話の共通性について、海を越えた交流のようなマクロな見通しを持っていました。だから私のポリネシア人のカヌーの話や移動の話にとても興味を示されたのかと思います。拙著『南島の神話』(後藤 2002)をゼミのテキストにもしていたそうです。八重山における民話データベースの構築でも、サントリー文化財団の助成金を遠藤さんが代表で頂いたのですが、途中で遠藤さんが亡くなったので私が代表代行を務めたこともあります。

遠藤さんは南方に関心があり、民話でも航海術の話でも天文の話でも、ポリネシアとの比較、沖縄と南方との比較に実はすごく関心があったのです。基本的なスタンスは地を這う

図13

ような地道な調査をやっていたのですが、その延長上に夢のある構想を持っていたということです。ですから、少し偉そうに言うと、私は遠藤さんが遠くに見ていた夢の最後の目撃者になったような気がしています。現地主義・資料主義に徹していましたが、その先に夢のある構想を持っていたのは、遠藤さんも篠遠さんも同じであると思います。

■四人の巨人を比較する

四人の巨人の関係についてもう少し比較をしていきたいと思います。仁さんと大林さんでは、大林さんの方が 10 歳も年下です。仁さんが主任教授をしていた考古学研究室に大林さんが教えに来ていたので、当然二人は認識し合っていました。ただ、お二人が話す姿を私は見たことがありません。仲が悪いわけではなく、それぞれ認め合っていたとは思います。神話の文献研究者と言われる大林さんも、物質文化や考古学には大変造詣が深かった方で、さらに仁さんと大林さんは共に北方研究の大家です。

私は、四人の研究者を次のように自分の中で整理しています（図 14）。マクロ、人類史的、学術理論的な研究をしたのが渡辺仁と大林太良です。渡辺さんが主に依拠した資料は、先史学や考古学で、物質文化と言ってもいいかもしれません。大林さんは言語伝承です。ただし、大林さんも考古学にも造詣が深かったので、この分け

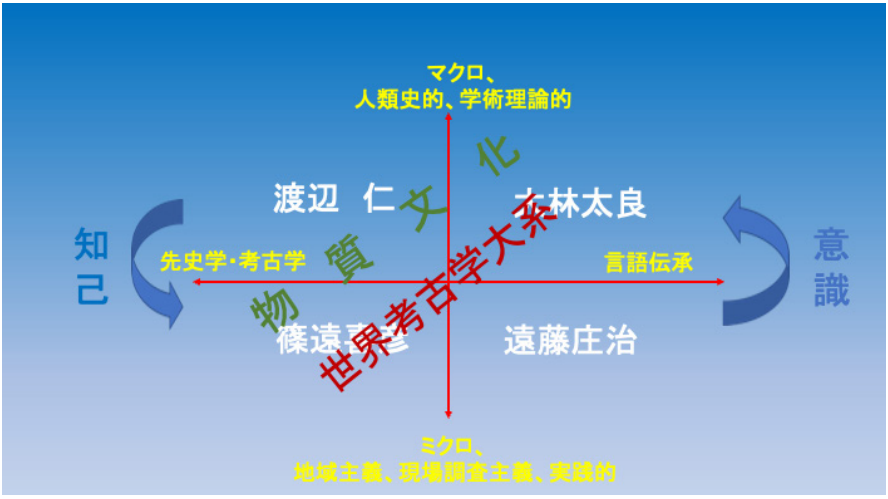


図14

方が全てだとは思わないでください。一方、ミクロで地域主義、現場主義、実践的な姿勢を持っていたのが篠遠喜彦さんと遠藤庄治さんです。遠藤さんも生前からNPO法人沖縄伝承話資料センターを立ち上げ、また沖縄の民話の会なども主催しました。民話を沖縄の社会に還元することを徹底的にされて、今もその動きは継承されています。篠遠さんと遠藤さんはこちらのサイドで、少なくとも私が学んだものはこのようなものだということです。

先に言うべきでしたが、渡辺仁さんと篠遠さんは考古学をベースにしていたので、当然物質文化の研究をしています。しかし大林さんも物質文化にはかなり造詣が深く、遠藤さんも、調査に巻尺を持っていったというぐらいですから、物質文化も全く無視していたわけではありません。また、篠遠さんと大林さんは『世界考古学体系』（石田・泉（編）1959）で同席していて、実は二人は日本の外国考古学のパイオニアでもありました。

渡辺仁さんは篠遠さんと知己であり、私がビショップの篠遠さんのところに初めて行ったとき、「先生は誰ですか」と聞かれて「初代オセアニア学会会長の渡辺仁先生です」と答えると、「ああ、仁さんですか」と言われました。お二人は国際学会で何度か出会っているようですし、「篠遠さんのところで釣針の研究をしろ」というのは仁さんが言ったことでもあります。それから、遠藤さんは大林さんのことを大変評価していました。文献も読んでいて、自分の研究は最終的には大林さんのような方が集大成するためのデータであるということを意識されていたようです。大林さんと遠藤さんがどれくらい知己であったか分かりませんが、日本伝承学会で大林さんが論文を書いたりしたので、すれ違っている可能性はあると思います。

仁さんと篠遠さんの共通の知人として、八幡一郎先生がいます。また、私と秋道智彌さんが会うと、いつも大林さんや仁さんや篠遠さんの話になります。遠藤さんと大林さんをつなぐ存在として、松山光秀さんという徳之島の郷土史家の方がいます。遠藤さんは松山さんのことを意識していて、知っていたのかもしれません。私が松山さんのところの徳之島に調査に行くというとき、一緒に行きたいとおっしゃいました。松山さんは大林さんの本もたくさん読んでいました。

それから、亡くなった山田仁史さんです。生きていれば四人目のパネリストとして今日必ず来てほしかったのですが、彼は文献中心で、大林さんの弟子のようになっていました。私は山田さんに「神話や民話をやるなら、ガチな現場を経験しなさい。調査を経験しなさい」と言って、遠藤さんに紹介しました。しかし遠藤さんはその

とき既に那覇の日赤に入院していて、その後郷里の福島に移られました。山田さんは１回だけ遠藤さんに会ったはずなのですが、その後遠藤さんも山田さんも故人となったので実現しませんでした。この２人はお元気であればつながっていて、しかも大林さんとのリンクもできただろうと感じています。

■北方研究の大家：渡辺さんと大林さん

大林さんと仁さんは共に北方研究の大家であることはご存じだと思います。仁さんは当然アイヌ・エコシステム、その後、北大の教授をしたり、北海道庁が出している最後のアイヌの民族調査も指揮されています。大林さんは、東大を辞めた後、東京女子大の教授になり、その後、北方民族博物館の館長もされていますので、北方研究でも大家です。このお二人は、北方文化論、物質文化、民族考古学、住居論、土偶研究、縄文社会研究と、かなり近接する業績をお持ちです。お二人の研究スタンスの似ている部分と方向性が違う部分については、今後比較したいと思っているテーマでもあります。この後、大西さんには、北方研究の立場からお二人の研究をどう捉えるかお話ししてもらいます。

■日本の外国考古学のパイオニア：大林さんと篠遠さん

大林さんと篠遠さんのつながりは考えたことがなかったと思うのですが、『世界考古学体系』というシリーズ本があります。戦後日本が復興して、やっと外国の研究をできる余裕ができたとき、それが文化人類学でもあり考古学でもあるのですが、そのときに平凡社から出たパイオニア的なシリーズです。私が熟読した本なのですが、その 15 巻に『アメリカ・オセアニア』（石田・泉（編）1959）という巻があります。先日、篠遠さんのレビューを書く機会があり、また大林さんのレビューを書く機会もあったので、彼らの執筆章を見てみると、大林さんはアメリカ、カリブ、オセアニア、メラネシアなどを書いていました。一方、篠遠さんは当然既にビショップ博物館で活躍し始めていたこともあり新進気鋭の研究者としてポリネシアを書いていますが、オーストラリアも書いています。このお二人はお互いをどれくらい知っていたか分かりませんが、日本の戦後の考古学においてオセアニアとアメリカ大陸というマイナーな地域の研究のパイオニアだったということです。

ちなみに調べてみると、この『世界考古学体系』には『東南アジア』という巻はありません。でも今は東南アジア考古学会があり、私も入っています。思い出があ

るのですが、大林さんの授業があった後、東大の研究室に行ったら、当時助手だった重松和男さんと、後に東大の教授になられた今村啓爾さんが大林さんと話していました。重松さんと今村さんが「東南アジア考古学会をつくりたいのです」と言うと、大林さんは「それはいいね」ということでした。「つきましては先生、会長になっていただけませんか」と言うと、「いやいや、君たち若い人がやりなさいよ」とおっしゃられていました。大林さんは結局ならなかったと思うのですが、東南アジア考古学会の設立にも頼りにされたということです。当時、東南アジアなどというのは、南アジアと東アジアの間とされ、日本の中ではあまり認識がありませんでした。その考古学の研究を推進した一つの柱となったのです。また、山川出版が出した『民族の世界史』の東南アジアの巻（大林（編）1984）では、大林さんと今村さんと宇野さんが東南アジアの考古学の概論を書いています。大林さんは銅壺（どうこ）の模様を神話学的に解釈するといったとても面白い論文を書かれています。

私の頭の中では、篠遠さんと大林さんはこのように日本の外国考古学、東南アジアやオセアニアの考古学、あるいはアメリカ大陸の考古学のパイオニアでもありました。言うまでもなく、アメリカ大陸はその後、東大の文化人類学の主戦場になります。私も寺田和夫先生に卒論の相談に行ったことがあるのですが、寺田先生は文化人類学の先生で私は考古の学生でしたが、「僕たちがアンデスをやったのは、江上波夫先生などの流れで東大の考古がメソポタミアをやっていて、なかなか手が出せなかったからアメリカ大陸に行ったのだよ」などと聞いたことがあります。寺田先生も『世界考古学体系』の新大陸のあたりを書いています。

■現地主義を貫く調査：篠遠さんと遠藤さん

篠遠さんと遠藤さんにも共通性を感じる点があります。仁さんと大林さんは、共に東大出身で、東大で教えた、いわば王道を歩いてきた人です。それがお二人にはプラスになっていると思うのですが、一方、そうではないルートを取ったのが篠遠さんです。篠遠さんは日本の通常の教育ルートを取らなかったということもあると思います。遠藤さんは立命館出身ですが、一時期学生運動でかなり活動した方なので、仁さんや大林さんと違ってオーソドックスな路線で育った人ではないような強さを持っています。だからこそ開拓者として大変魅力があると私は感じるわけです。

先ほど、遠藤さんの「声を発した瞬間を記録すべし」というスタンスを紹介しました。これに関しては、例えばライティング・カルチャーなどを経験した世代は、

客観的なデータなどはないと言うかもしれません。私も学問の世界に入ったとき、日本考古学の「遺物をして語らしむ」というとてもナイーブな実証主義的姿勢に実は反発を感じていました。つまり、「遺物も遺跡も、結局現代人であるわれわれの解釈が入らざるを得ない。だから自分の依拠する解釈的立場を意識すべし」と考えていたのです。それで日本考古学には居心地の悪さを感じていて留学したということもあります。しかしアメリカというのは天真爛漫な別の意味でポジティズムの世界で、実証主義の世界です。解釈が言われるようになったのは、イアン・ホッダーの解釈考古学以降かと思います。ただアメリカの場合は、例えば新進化主義など、依拠する理論をはっきりさせてその上で議論するというスタンスがあったので、私にはそちらの方が向いていると思って留学しました。

一方、日本考古学が戦後、皇国史観を批判して、声なき人の営為である遺物とその使途状況を徹底的に記録しようとしたのは理解できます。同様に、遠藤さんは、とにかく話者が語る内容は全て価値があって記録するという姿勢を貫いていました。遠藤さんは別にロマンチックな意味の民話を収集しようとしていたわけではありません。沖縄の古老とお話しすると必ず沖縄戦や戦後の苦労話が出てきます。それは通常の民話の理解には入らない話題だと思いますが、遠藤さんは、研究者が勝手に語りに価値を付けずに、まず話者に肉薄しなさいと教えてくれたのだと思います。それがテープレコーダーに象徴されていると思います。

篠遠さんはハワイ、ポリネシア、遠藤さんは沖縄という、自分の生まれた場所ではないところで、地元の人々を巻き込んで偉大な業績を残しました。篠遠さんが考古学発掘の姿勢、さらにフアヒネ島で見た現地の方々を巻き込んでいく姿勢、遠藤さんと篠遠さんが調査現場において実地で示してくれた現地の方々との調査の姿勢は、私が頂いた大事な遺産だと思っています。これは論文などにはしづらいので、今日のような機会に話させてもらったのは幸いです。

■生態学・形態学の視点で整理する私の研究

最後になりますが、私は一時期、自分の自己紹介を「物質文化と言語文化の研究」と書いていました。物質文化と言語文化というのは相反するカテゴリーのように思えるかもしれませんが、私にとっては同じものでした。元々考古学で5000点ほどのハワイの釣針を分析したのが私の博論ですが、そのような物質文化を研究している人間で、その後勉強した言語学などを通して神話の研究などにも入っていきました。

しかし、神話も自分にとっては物質文化と同じことです。その形や構造を比較すること自体が面白く、さらに、その比較の上に立って、社会や文化あるいはコスモロジーなどと関係付けるのが面白いのです。

そのような物質文化と言語文化という軸がある一方で、形態学と生態学という軸があると私は整理しています。土器の研究でいうと、1997年にインドネシアのマレ島の土器に関する論文を二つ、あえて同じ年に同時に発表しています。一つは形態学で、もう一つは生態学だと思っています。形態学の方は民博に出した論文で、土器の形態や紋様の施文法、動作連鎖、身体技法などについてで、最終的にそれが認知の問題にも関わっていきます。私はそういうものを形態学と考えています。一方、同じマレ島の土器でも、土器製作集団の社会経済にとっての土器の販売システム（海人論、漁労＝土器製作＝交易者モデル）は、土器の持っている経済的、社会的な意味です。私はこれを生態学と理解しています。

同様に、言語文化研究ではハワイ日系墓石の碑文の研究を1990年代にずっとやっていました。例えば旧漢字を使っているのか新漢字を使っているのか、アルファベットなのか、縦書きか横書きかというような形の問題です。文字そのものを形として捉えるというようなことで、私はこれは形態学だと思っています。一方、例えば命日の表記が真珠湾攻撃前後から元号から西暦に変わるという現象は、碑文が持っている社会的戦略が含まれていると考えていて、これは生態学だと捉えています。ハワイ日系移民のお墓の写真を見ると、「大正8年」の横に「1941年」と書かれていて、西暦表記に変わっています。このようなことは数多くの墓で確認されています。それまで日本人という意識を持っていた日系人が、戦争が起こってアメリカ人として生きようと意識を変えていったという戦略がここに反映されているのだと思います。さらに最近は「December」や「January」などと英語になっていくのでまた変化していくのですが、これは当然、日系人世代間の語学、とくに日本語能力の変化を反映しています。

私がこのようなことを考えるようになったのは、言語学を勉強したからです。言語学では音声学、音韻論、形態論、統語論などを勉強していきます。音声学というのは音声の研究です。音韻論というのは、音が言語の中で持っているカテゴリーで、例えば日本語ではｒとｌを区別しないといった言語ごとの特徴に関するものです。さらに形態学というのは、いわゆる単語の活用のようなことです。それから統語論があります。私はこれらを形態学だと思っています。一方、言語が社会の中でどの

ように語られ、どのような意味を持っているのかという実践論や談話分析、社会言語学というのもあって、これらは生態学だと考えています。このことがモデルとして私の頭にはあるのです。

歴史言語学や意味論は、形態学と生態学の両方の境界にまたがるものかと思います。歴史言語学では例えばポリネシア祖語の語彙や音韻の復元をしますが、これは形態学です。一方、ポリネシア祖語に例えばチーフ（首長）やマナー、タブーといった概念が存在したらどのような社会であろうと推測することは、むしろ生態学です。意味論の方も、語彙分析として私自身がやっている事例では、ポリネシア語の魚名の構造分析は形態学であるし、例えばイトマキエイが「蝶々」という名前で呼ばれるのはなぜだろうと考えるのは象徴性の問題になってきます。そのような問題は意味論と捉え、両方にまたがっています。

最近行っている言語文化の形態論の研究としては、神話テキストのコーパス言語学やテキストマイニングがあります。これは大林さんの時代には実現しなかったのですが、今は神話のテキスト自体をコーパスとして統計的にに分析させ、関係性を探るという方法が可能になっていますが、理化学研究所のプロジェクトなどの一環で行ったりしています。一方、神話の研究には王権論や世界神話学の研究もあって、人類が移動し環境が変わることがそれにどう関係するかということもあります。これは神話の生態学だと私は思っています。

一方、形態的な物質文化でいうと、カヌー形態の統計分析があります。これは今度人類研のモノグラフで出る『環太平洋の原初舟』（後藤 2023b）という本でも書いています。こういうことも引き続きやっていきます。このようなことは篠遠さんや遠藤さんのような方が集めた良質な大量のデータがないと可能ではありませんが、それはそれで大変面白いです。

古代舟復元プロジェクトや考古天文学は、生態学と物質文化との交差点に存在するプロジェクトだと思って、今楽しみながらやっています。古代舟復元プロジェクトというのは、例えば喜界島なら喜界島で手に入る材質で舟を造り、実際に浮かべてみるというものです。古老から植物に関する知識を聞いたりしながら楽しく舟を造ってみるという、生態学と物質文化の交差点にある試みかと思います。考古天文学も、遺跡と天文現象との関係から当時のコスモロジーや社会などと関係付けていく研究で、自分にとっては生態学と物質文化に入ると思っています。

■研究活動の社会還元

最後に、学問の研究以外にも、社会とのつながりということで、天文人類学と文化天文学と称して日本各地で活動を続けています。佐賀県の吉野ヶ里遺跡や鹿児島県の喜界島などで、地元の方々や学生などに解説を担当させるというプロジェクトを進めてきました。今年もやってほしいという話もあります。実際、私のゼミの教え子がイベント会社に勤めていて、今度は名古屋の小学生にも解説させるようなプロジェクトもします。メッツ大曽根というところで2023年8月26日にやると既に決まっているのですが、大学を退職したら、今度は小学校の子どもたちを指導することも楽しみにしています。

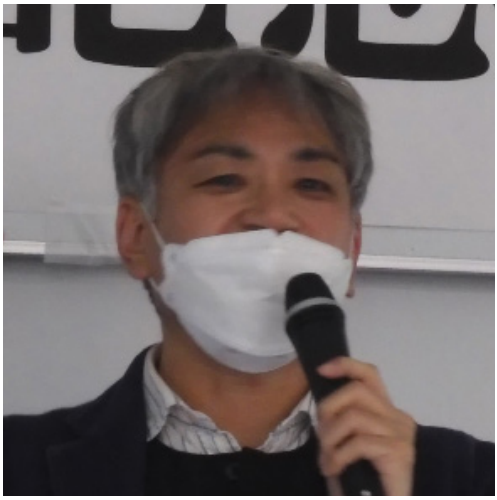
現在私は、Web等の自己紹介では、「物質文化と言語文化」という分かりにくい表現から角度を変え、「海洋人類学と天文人類学が専門」と書いています。海洋人類学は元々やってきた漁具やカヌーの研究の継続です。天文人類学については、大林さんは晩年、銀河についての大著を著し、次はお月さまの神話を準備していました。遠藤庄治さんは私のポリネシアや航海術や天文学の話に関心を示し、沖縄の天文の民話が圧倒的に宮古・八重山に多いのは、沖縄本島から宮古の間には距離があるので天体を使った意識が高いのではないかと考え、道半ばとなったサントリー財団の助成金でも沖縄と南方世界の天文神話の比較などを模索していました。だから天文人類学の方は、大林さんや遠藤さんに「やりなさい」と背中を押されているような気持ちでやっていきたいと思っています。そして海洋人類学と天文人類学を統合して、これからは「海／天（あま）の人類学」と自分を称していきたいと思っています（後藤 2023c）。

私は社会活動も大きな目標としています。昨年度は鹿児島県の喜界島サンゴ礁科学研究所の行っているサンゴカレッジ、佐賀県吉野ヶ里遺跡の「卑弥呼の見た星空」などを通して、「楽しく」をモットーに学外の活動を継続しています。今年は名古屋の小学校で行い、他のところからもお声掛けがありますので、自分の研究を続けながら社会と関わっていくつもりです。これは篠遠さんや遠藤さんが教えてくれたことだと思います。今後とも力が続く限り、「海／天（あま）の人類学」を柱として、研究活動や社会アウトリーチ活動を続けていきたいと思います。これが、4人の巨人から頂いた遺産を自分なりに受け継ぎそれを研究と社会に還元していくための方法ではないかと思っています。

講演 2

北方研究の立場から

―日本人類学にとっての北方研究―



大西秀之
（同志社女子大学・教授）

ご退職を飾るシンポジウム形式ということだったので、後藤先生に関して、角南さんと石村さんとで思い出話でも語ればいいのかなと思っていたのですが、予想に反し30分の報告時間と「北方研究の立場」とのお題をいただきました。しかも、今回は他の報告者のお二人とも、綿密な打ち合わせをおこなっていません。ただ内容的には、かなり共鳴するところはあるのでは、と勝手ながら思っています。

今日この場には、南山大学の関係者、また日本文化人類学会中部地区研究懇談会の関係者、さらには昨年3月に後藤先生のご退職を記念し有志で出させていただいた『モノ・コト・コトバの人類史』（後藤・大西（編）2022）の執筆者も少なからず、お越しです。その多くの方々は、教育機関の制度の中での師弟関係などではなく、後藤先生という碩学の下に集われたのではないでしょうか。このような素晴らしく、また貴重な機会に、僭越ながら露払いとしてお話しさせていただければと思います。

私は、「北方研究の立場から」という役割を、本会の企画者からいただいたのですが、「日本人類学にとっての北方研究」というサブ・タイトルを付けさせていただきました。これは決して、大仰なタイトルを掲げたとは、個人的には思っていません。今回は、後藤先生を語るというよりも、後藤先生を料理具材に、渡辺仁と大林太良の二人の「知の巨人」で味付けをしながら、日本の人類学にとって北方研究はどのような学史的位置付けを与えることできるのか、というトピックを思いつくままに語ってみたいと思います。ちなみに、ここでの人類学は、文化／社会人類学や民族誌研究だけではなく、考古学や文献を使うような異文化研究も含めることとします。

■日本の異文化研究の始まり

まず人類学ではなく、あえて「異文化研究」から話をはじめたいと思います。日本の異文化研究は、どこから始まるかというと、やはり北海道のアイヌ民族と、現在の南西諸島、沖縄諸島の琉球王国を対象とした研究です。日本の帝国支配、植民地主義は、異文化研究にとって功罪両面のレッスンの場を提供したのです。

ところで、北方と南方では、根本的な違いがあります。なにが違うかというと、まず南方は王国「dynasty」でした。日本の教科書では、薩摩島津氏が間接統治していたとか、清朝の二重支配下にあった、などと一般的に語られるのですが、少なくとも日本が沖縄県という国内の一地方行政区に編入するまでは、琉球は国際社会の中で確固たる独立国家でした。どれ程であったかというと、ペリーが浦賀に来航し、アメリカ大統領の親書を征夷大将軍に手渡す前に、那覇の首里城に行って琉球王府

に親書を出していたのです。それぐらい、国際社会の中では、独立国家として承認されていました。こうした背景や認識は、一般社会で共有されていませんが、そういう独立国家を日本の帝国主義は支配し、しかも自分たちの版図の一部として組み込んでいったのです。

図1　大日本帝国の植民地を含む行政統治・軍事勢力圏
出典：Wikipedia（https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=16999831）

もう一方の北には、北海道を中心にアイヌ民族と呼ばれる人々が暮らしていました。そして、近代の日本は、彼ら彼女らを先住民として「文明化」の名の下に同化政策を強制しました。これもよく植民地人類学の文脈などで語られるのですが、西洋近代社会ないし帝国主義の立場からは、博物館に並べられる存在であった日本列島の住民、社会、文化が、今度は博物館に並べる存在としての異文化を創り出していった、そういうアカデミズムを超えた政治文化的な意味でも、日本列島の北方と南方は非常に大事な地だったのです。

さらには、日本の帝国主義は、内国殖民地としての北海道での経験を、植民地支配の中で台湾原住民に対して応用しました。北海道に開校された札幌農学校が植民地行政官を産み育てていく場となり、台湾原住民支配をはじめ、第一次世界大戦後にドイツ領を引き継いだミクロネシアに設置した旧南洋庁の現地住民支配にもつながってゆきます。他方、私は専門ではないので、あまり軽々な事は言えないのですが、朝鮮半島などの支配は、琉球王国の経験をかなり引き継いでいて、そこには植民地行政官やいわゆる資本主義の商人なども、かなり関与し行き来していたことが分かっています。そういう中で、異文化研究、取り分け「植民地主義の娘」としての人類学というものが、戦前の日本で醸し出されていきました。またご存じのように、日本の植民地の拡張が異文化研究としての人類学に、新たなフィールドを提供する要因となりました（図1）。

これに対して、植民地を全て失った第二次世界大戦後は、状況が一変します。どうなったのかというと、日本に残された異文化研究のフィールドは、沖縄と北海道

のみとなり、もう一度原点に戻ります。その結果、現在日本文化人類学会である旧日本民族学会がアイヌ民族綜合調査を北海道で企画し、渋沢敬三の提唱によって組織された九学会連合などが南西諸島で調査を行うこととなります。

ただその後、日本の文化／社会人類学を中心とする民族誌調査に基づいた人類学的研究は、南に偏重していきます。一つはアフリカ、一つは東南アジアです。実際、旧『民族學研究』を見てみると、1990 年代初頭までは、圧倒的多数の論稿がそれらの地域を対象にしています。戦後の日本の文化／社会人類学を推進した東京大学や京都大学、さらには都立大学や南山大学などの関係者も、ほとんどが南を志向していました。ちなみに、京都大学はなかなか文化／社会人類学の講座が開設されなかったのですが、人文科学研究所に加え、東南アジア研究センターやアフリカ地域資料研究センターが、実質的に人類学的研究を担うことになりますが、そこからも南に偏重していたことをうかがい知ることができます。

なお北が人類学的研究から外された理由は、非常に簡単です。一つは、人類学の対象となった北方先住民が暮らす地が、第二次世界大戦後に社会主義・共産主義の支配圏になったため、日本をはじめ西側諸国の研究者が民族誌調査をできなくなったことです。もう一つは、アメリカやカナダという先進国の中の先住民が、開発や近代化の影響を受け変容する中で、なかなか北方研究が進まなくなったことです。そうした状況は現在にも通じているのではないかと思います。なおこれは、今日の私の報告の中核的なポイントにもなります。

■渡辺仁の学説史的位置付けと研究理論

北方地域を対象とした人類学的研究が低調となる中、学説史に刻まれる一つの研究成果が、現在の CHaGS（国際狩猟採集民会議）の母体となった国際研究会議 Man the Hunter（図 2）の場で、渡辺仁によって報告されることになります。この渡辺の報告は、後年、記念碑的業績となる *The Ainu Ecosystem*（Watanabe 1972）（図 3）として出版され、国際的に最も著名なアイヌ研究になるとともに、日本の人類学を代表する研究成果ともなります。

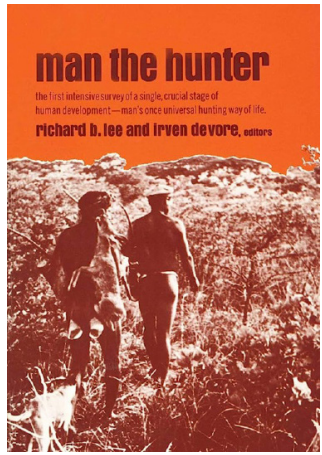


図2　Man the Hunter

そこで渡辺が打ち出したのは、端的に表現する

ならば、北方の狩猟採集民は、南の狩猟採集民とは根本的に違う、なかでも重要なのが、北方では農耕社会で見られるような定住化がなされ、富の蓄積を含めた社会階層が起きている、という指摘です。これまでステレオタイプ化された南方の狩猟採集民像とは異なる、国家なき蓄積や国家なき社会階層が北方の狩猟採集民社会で営まれ、さらに威信経済のようなものまである、ということが指摘されたのです。ここで言うステレオタイプ化された南方の狩猟採集民というのは、決して日本の人類学だけではなく、世界の人類学の中で共有されてきたものでした。

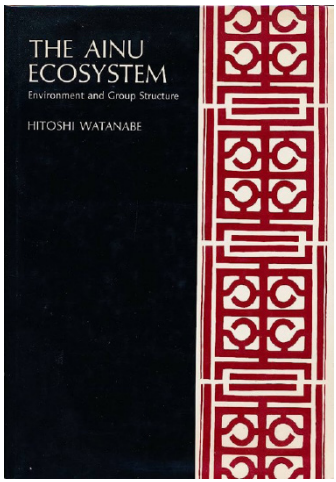


図3　*The Ainu Ecosystem*

図4　縄文式階層化社会

もう一つ大事なポイントは、ジュリアン・スチュワードが提唱した文化生態学などの理論的背景にある、マルキシズム的な環境決定論に基づく下部構造による上部構造の規定を、渡辺仁が徹底的に批判していることです。渡辺仁は、『縄文式階層化社会』（渡辺 1990）（図 4）という単著を刊行しているのですが、これは考古学を専門とされる方でもなかなか手に取った方が少ないのではないかと思います。まして、文化／社会人類学や民族誌研究をされている方で、知っている人はほとんどいないかと思います。

都立大で社会人類学を学んで北方研究をされている方が「『縄文式階層化社会』は、民族誌研究の集大成とも言えるすごい本だ。でも、縄文だけに限定しているように読めるタイトルが悪い」とおっしゃっていたのをよく覚えています。確かに指摘の通り、この本は縄文社会を語っているのではなく、縄文社会を one of them として北方社会の狩猟集社会の特徴を描き出したものです。その中でも、決して社会の複雑化や階層化は、環境要因や下部構造が決定しているのではなく、むしろ威信経済などの上部構造が形成を促しているのだ、ということを徹底的に論証しています。

ただこの非常に重要な論点は、学会で共有されずほとんど理解されていないのではないかと思います。

いっぽう、考古学と民族誌の接合という観点では、雄山閣から出版された『人類学講座 12 巻生態』（人類学講座編纂委員会（編）1977）（図 5）の中で渡辺仁は、ルイス・ビンフォードによってエスノアーケオロジーが提唱され国際的に周知される前に、明確に「遺伝も文化も形質も、結果にしか過ぎない。結果をわれわれは手にしているだけだ。そのプロセスは民族誌研究でしか見られない。だから、自然人類学も、先史人類学も、考古学も、言語人類学も、民族誌を見なければならないのだ」という極めて重要な先見の明を打ち出しています。

図5　人類学講座12巻生態

では、渡辺仁の学説史的位置付けはどうなっているのか、というと特に 1980 年代の終わりから 1990 年代にかけて、ニューアーケオロジー運動などとともに日本で渡辺仁が再評価された流れを知っている考古学者にとっては意外かもしれませんが、文化／社会人類学どころか、その中で生態学的アプローチを担当していると自認する生態人類学の中でさえ、渡辺仁は忘れられた存在になりつつあります。もっとも、渡辺は、東京大学の理学部人類学で、日本の生態人類学を推進されてこられた秋道智彌先生や、昨年ご逝去された東大医学部の人類生態学講座を長年指導されてこられた大塚柳太郎先生など、重要な後進を育てています。

しかし、『生態人類学を学ぶ人のために』（秋道・市川・大塚（編）1995）（図 6）という本を手に持ってみると、そこでは「王殺し」が行われていることを見出すことができます。京都大学理学部の人類進化論講座ないしは霊長類学の文脈で、伊谷純一郎や田中二郎の系譜が語られる一方、東京大学の方は理学部人類学講座の名前は出るのですが、大塚柳太郎と鈴木継美から始まる学説史となっていて、渡辺仁がその前段に位置づけられず、その名前が消されています。編者の一人でもある秋道先生や、東大人類生態学を主導された大塚先生が、渡辺仁の弟子でもあるにもかかわらず、このような語りがなされるというのは率直に言って不思議な、ある意味非常に興味深い現象ではないかと思います。

実は数年前、中部人類学談話会の「特集 生態人類学の現在」（2012 年 7 月 21 日、9 月 29 日実施）が開催された時に、霊長類学や生態人類学を専門とされる京大の方々と話をしたのですが、ほとんどの方が渡辺仁の記念碑的な著書である『ヒトはなぜ立ち上がったか』（渡辺 1985）（図 7）を読んだことがないということでした。ただし、誤解を恐れずに言うならば、田中次郎先生や市川光雄先生、亡くなられた掛谷誠先生は「仁さん、仁さん」と事あるごとに、生態人類学会で名前を出しておられていて、きちんと日本の生態人類学ないしは生態人類学会設立の中で、渡辺仁という存在が大きな役割を果たしていたことを認識されていました。しかしその事は、公式にはあまり語られていない状況にあります。

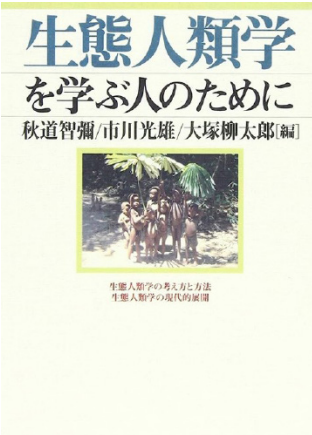


図6　生態人類学を学ぶ人のために

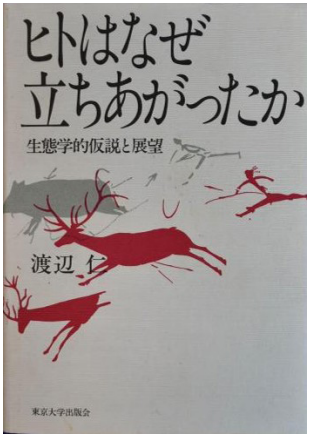


図7　ヒトはなぜ立ちあがったか

ところで、渡辺仁は戦後すぐにロンドン大学に留学し、構造機能主義を徹底的に学んでいます。秋道智彌先生は「私は仁さんに『秋道君、生態人類学をやるのだったら文化／社会人類学をまず徹底的にマスターしなさい。そこから初めて生態学的アプローチができるんだ』とよく言われた」とおっしゃっていました。こうした事実に対して、1980 年代の終わりから 1990 年代にかけて、東京大学の考古学グループの安斎正人先生や佐藤宏之先生などが盛んに渡辺仁をフィーチャーし、いかにニューアーケオロジーにつながる思考を持っていたかを語ってきました。こうした背景が、ものすごく渡辺仁の評価を、日本で難しくしているところではないかと個人的に思っています。

そんな状況を踏まえ、今日は北方研究を推進した渡辺仁の理論をお話ししたいと思います。まずはエコシステム論からお話をします。渡辺仁といえばエコシステム論というくらい著名ですが、これには往々に一つの誤解が含まれる傾向が指摘できます。というのは、彼のエコシステム論を環境決定論と思い込んでいる方が少なか

らずいるからです。しかし実態は、渡辺仁のエコシステム論は極めて社会決定論的になっています。地理学では環境可能論というものがあるのですが、そのような理論に非常に近似しています。あえて私の解釈で今風に言うと、自然環境の特定要因を社会の仕組みが生態学的ニッチとして広げているのだ、というような内容になっています。そこが大事な論点になります。

他方で、渡辺仁のエコシステム論は、もちろん帰納法的に要素から積み上げていく説明方法とは違っていて、演繹的アプローチとなっているのですが、ただこれはニューアーケオロジーの仮説演繹法と少し違うのではないか、と個人的に思っています。そしてこの理論は、極めて理論負荷的なものになっています。ニューアーケオロジーの仮説演繹法とは違うではないか、というのは、ついこの間のハワイでの国際会議で後藤先生と話をした際に、「渡辺先生の論文を読むと、『この要因とこの要因がこう関係するからこうした結論となる』という説明が一切ない」ということで同意したことから着想を得たものです。

渡辺仁のエコシステム論は、モジュールになっているのです。モジュールとは、分析概念と説明概念がセットになっているものです。この話をする前に、少し話が飛ぶのですが、文化／社会人類学における文化を事例にして、分析概念と説明概念をなるべく簡潔に説明したいと思います。まず文化／社会人類学の文化の説明が分かりにくいのは、分析概念と分析対象や説明概念が同じ文化という言葉になっているから、という指摘ができます。例えば、「文化というのは意味の網の目だよ」と言って社会行為を読み解こうとするときの文化は、対象ではなく分析概念です。ただこうした役割以外にも、文化は分析対象として設定され、実際の社会を読み解いていこうとする場合もあれば、「社会がこれこれこうなっているのは、こういう文化があるからだよ」というように解釈概念ないしは説明概念として用いられる場合もあるため、取り扱いを間違えると文化で文化の説明をしてしまう愚を犯してしまう危険を常に含んでいます。よくあるように、「なぜこういう文化の違いがあるのですか」という疑問に対して、「文化背景が違うからです」というトートロジカルな、循環論法的な説明になってしまうわけです。ですから、分析概念と解釈概念ないし説明概念は分けなければいけません。

こうした課題を踏まえた上で、渡辺仁のエコシステム論を検討したいと思います。一例として渡辺は、個人が社会活動をどう行うか、という問いに対して、社会活動は現実の環境に働き掛ける技術とともに、死後の世界や災厄などが起こるメカニズ

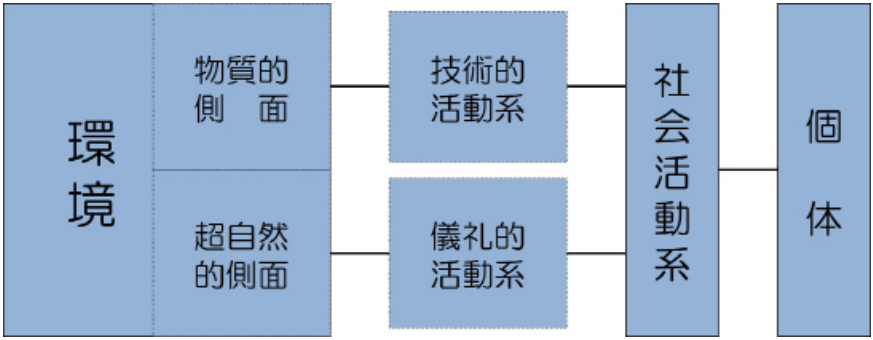


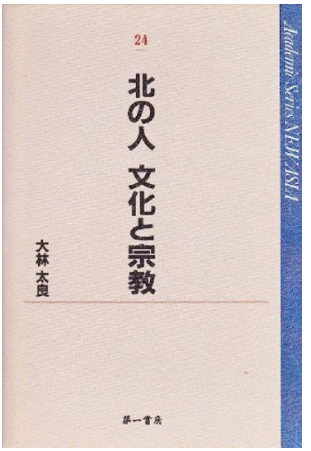
図8　環境に対する人間の働きかけ
出典：渡辺仁1977「アイヌの生態系」『生態』（人類学講座12）

ムを人間が頭の中で仮構した超自然などに対する実践として儀礼や信仰体系を行っている、という説明をします（図8）。これら二つが環境に対する働きかけになっているのですが、アプリオリに人間行動は技術的実践と儀礼的実践に分けられることが提示されており、ある個別具体的な人間行動をどちらかの要因に配置すれば、あとは因果を説明しなくても社会的にどのような役割を果たすか説明や理解が得られる、という論理構造となっているのです。

こうした説明や解釈がセットになっていることは、例えば渡辺の著名な概念である「上級狩猟民」に関しても認められます。上級狩猟民とは、「こうした条件をそろえているものだ」というように要因と説明がセットになった条件と構造を事前に提示されています。ですので、その条件にフィットする要素がなければ上級狩猟民というものは存在しない、逆にフィットする条件があれば上級狩猟民が存在する、という形で説明や解釈が自ずと導かれることになります。

東京大学のダーウィニズム研究の第一人者の佐倉統さんが、「ダーウィニズムが滅ばないのは、ダーウィンの進化論はモジュールになっているからだ」と指摘しています。つまり、ダーウィニズムの理論は、それそのものが「正しい」のか「間違っている」のか、という対象ではないのです。ダーウィニズムというモジュール化された説明の構造ないしシステムに、該当する要因を組み込めば、これこれこういう進化の説明になる、というような考え方になっているのです。この辺が、実は日本の生態学や生態学のアプローチの中でも、あまり理解されていない重要な論点ではないか、ということを考えています。

これまでの話を踏まえた上で、後藤先生に禅問答で有名な質疑の掛け声「そもさん」を発したいのですが、では渡辺仁は南方地域をどのように位置付けていたのか、後でお聞きできればと思います。



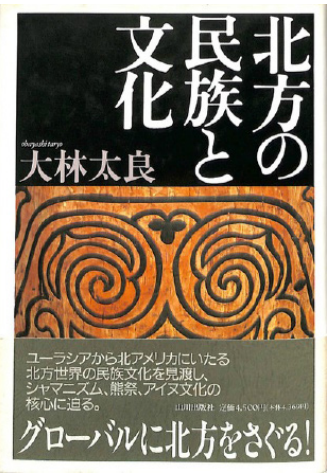


図9　大林太良の北方文化に関する著作

■大林太良の学説史的位置付けと研究理論

話をもう一人の北方研究を推進した人類学者、大林太良に移したいと思います（図 9）。大林は神話・伝承・民話・民族誌などを研究対象にして多数の論稿を世に問うています。その中で大林は、卑近な言い方になるのですが精神文化や信仰体系などを対象として、普遍的な北方世界の傾向性を指摘したり、同地域と日本列島との関係性などを論じています。

ところで、大林太良の学史的な位置なのですが、経歴だけを見るとまさに本流といえます。東大の東洋文化研究所の助手を務め、東大の文化人類学講座の講師から教授までを勤めあげています。ただし、日本の戦後の文化／社会人類学の中では、実は大林太良は極めてクラシックなスタイルのドイツの歴史民族学を引き継いだ研究者として往々に説明されています。実際、フランクフルト大学を経て、ウィーン大学で博士号を取り、ハーバード大学にも留学をしています。そして、大林の研究

に構造機能主義はうかがい難く、歴史民族学や比較神話あるいは伝播主義的研究が前面に打ち出されています。またこの点は、もし山田仁史さんがご存命であれば詳細に語っていただきたかったのですが、大林太良はフランクフルトでは文化形態学派を、ウィーンでは文化圏学派をそれぞれ修めています。

では、大林太良の理論はどのようなものなのか。これは既に語られていることではあるのですが、極めて構造主義的です。大林太良先生の直弟子であり、北方研究を日本の文化／社会人類学の中で推し進めてきた一人である、国立アイヌ民族博物館で館長をされている佐々木史郎さんが、ある時「大林太良の個々の論文は、分かっていないとつまらないよね」とおっしゃっておられました。これは決して表面的皮相的な批判などではなく、大林の論稿は全体の構造の中に位置付けないと、ただのディスクリプションに過ぎないということを端的に表された言葉なのです。

確かに、実際に検討してみると、大林太良の議論はまさに構造分析になっています。南方の話になるのですが、国立民族博物館で行われた一大プロジェクトとして、大林太良が中心メンバーの一人となって東南アジアのデータベース作りが行われました。これは一言でいえば、多変量解析のプロジェクトです。まだコンピューター民族学が産声を上げた少し後ぐらいに、G.P. マードックの HRAF のような形で、東南アジアの多種多様な物質文化から精神文化的な要素を全て詰め込んで、東南アジアから太平洋地域にかけての要素がどのような関係になっているのか、ということを分析検討しようとした試みです。詳しく語るまでもないのですが、いわゆる構造を措定して、その中から要素を抽出し、それらの関係性を見出そうとしてします（図 10-1, 2）。先ほど後藤先生が講演の中で出された、北方地域の「銀河は渡り鳥の道」の話の分布と極めて似た形となっています。

こうしたことを踏まえると、実は渡辺仁と大林太良は、非常に似た理論を共有していたのではないか、との結論を導くことができます。端的に表現するならば、両者の理論は、極めてシステム論であるといえます。個別の要素を積み上げていって、帰納主義的に説明に至るのではなく、ある個々別々の要素を自分たちの頭の中で措定した構造の中に入れ込んで、その構造から結論を導くという研究を行っていることがうかがわれます。

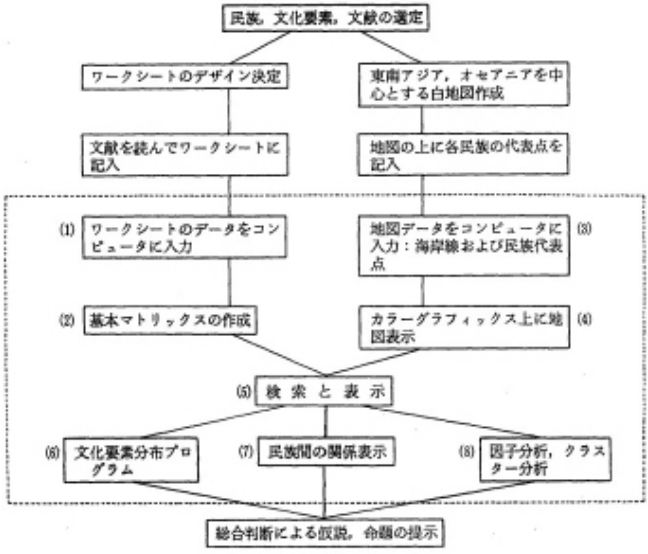
そこで再び、後藤先生に「そもさん」を発するのですが、では当の大林先生は民族誌調査の実践をどう位置付けていたのか、ご意見をお聞きしたいと思います。大林研究の極めて構造主義的なところを知っていると、物質文化の分析にも行われていることが分かります。例えば、大林は縄文時代の墓制を対象として、そこに双分制の構造がある、

表1　天地分離神話（4301）と地下からの先祖神話（4305）の比較

地下からの先祖神話 ＼ 天地分離神話	あり	なし
あり	Sumbanese, Sentani (2)	Ao Naga, Angami Naga, Sema Naga, Lakher, Thado-Kuki, Wa, Lushai, 貴州 Miao, Mnong Gar, Jarai, Iban, Minahasa, Alorese, Kei, Santa Cruz, Ontong-Java, Waropen, Seltaman, Yimar, Trobriand, Walbiri (21)
なし	Sakalava, Khasi, Akha, Black Tai, White Tai, Muong, Nias, Mentawetian, Southern Toradja, Eastern Toradja, To Mori, Bugis, Makassarese, Balinese, Endeh, Lio, Kedang, Wemale, Hanunoo, Ami, Paiwan, Puyuma, Gilbert, Ponape, Niue, Society, Southern Cook, Maori, Tongareva, Rossel Islanders (30)	その他

括弧内は，該当する民族数をあらわす。

出典:10‐1　大林太良1990「神話4300」
『国立民族学博物館研究報告別冊』11号



出典:10‐2
杉田繁治1990「コンピュータによる文化クラスターの分析」
『国立民族学博物館研究報告別冊』11号

図10-1，2
東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベース

という分析なども行っています。つまり、大林にとっては、テキストであれ、モノであれ、発話であれ、文章であれ、どんな素材であっても関係なく構造分析の対象となる要素となります。実際、東南アジアのクラスター抽出は物質文化でも行われています。

とはいえ、大林太良が東大文化人類学講座の主任教授にもなりながら、現在の文化／社会人類学の中で必ずしも正当に評価されていないのは、民族誌調査を行っていないからではないかと邪推することができます。一年以上、できれば二年間現地でフィールドワークを行い、現地の言葉を習得し、現地の習慣を理解して、当該地域の文化を理解する、というマリノフスキーが打ち立てたフィールドワーク神話から、大林太良の研究は確かに外れています。しかし、去年の文化人類学会で、大林と同じく戦前にウィーン大学で歴史民族学の大家シュミットに師事した岡正雄も、「いわゆるマリノフスキー神話に値する長期のものではないけれども、フィールドワークをやっていた。現地との交流もあり、ラポールも取っていた」というような報告を聞きました。であるならば、大林太良にとって、民族学の中のフィールドワーク、特にエスノグラフィーの調査を、どのように位置付けられていたのか、という疑問を後藤先生にお聞きしたいと思います。

■北方研究を再考する

もう残り時間がわずかになりましたので、大急ぎで話を進めますと、人類学史における北方研究の意義は再考すべきだと思っています。北方研究は、日本列島の文化の多様性の理解や植民地統治の基盤となりました。戦後に文化／社会人類学が導入されるのですが、実は最近、私が国立民族学博物館で泉靖一アーカイブの特に沙流川調査、戦後のアイヌ民族綜合調査の部分の再検討をやっている中で、一つ明らかになったことがあります。こんな言い方をすると、少し誤解されるかもしれないですが、泉靖一は戦前から極めてゴリゴリの社会人類学をやっていたということです。

では、マリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンなどの構造機能主義をどう知ったかというと、戦前の京城帝大の自分の師匠であり社会学者である秋葉隆や、同じく指導を受けていた宗教学者の赤松智城の二人からです。戦前の構造機能主義は社会学や宗教学が導入していました。泉靖一は、この二人の師から構造機能主義を受容し、例えば大興安嶺のオロチョン族の調査などをしていたことが分かっています。日本

の戦後の文化人類学・社会人類学は東大や都立大から始まったという語りが流布しているのですが、それとかなり異なる実態があったのではないかと思っています。これは単なる学説史上の問題ではなく、方法論的にも重要な問題ではないか、と泉の調査資料の検討から個人的に考えていることです。

他方で、説明概念と分析概念をモジュール的なセットとして設定し、そこに要素を組み込むようなシステム論的な思考の渡辺仁の生態人類学や、大林太良の神話の構造分析は、レヴィ＝ストロースの神話の構造分析とどう違うのか非常に気になります。これもシベリアのアムールで調査をしたときに、佐々木史郎先生から直接聞いた話なのですが、大林は生前「レヴィ＝ストロースの神話の構造主義研究などはヨーロッパの分析パターンの一つだよ。あれだけが全てではない」と、はっきりと語っておられそうです。大林太良は構造分析をしたと自著では少し書いているのですが、ではこの大林太良なる巨人がどんな神話の構造分析を構想していたのか、そこに民族誌研究がどんなふうに位置付けられるのか、ということを問いただしてみたいと思います。

最後に、三つ目の「そもさん」です。後藤先生に「せっぱ」いただきたい最後の質問は、後藤先生は当初から南を志向されていましたが、卒業論文や修士論文などでは北の釣針などを対象に研究をされています。しかも、先ほどのご講演を聞く限り、先生はシステム論や構造論としての渡辺仁や大林太良の研究をじかに理解し、またその薫陶を受けられてこられたと思います。そんな経験の中で、ご自身が北方地域をどのように位置付けられていたのかという質問です。

ということで、ちょうど私の持ち時間がいっぱいになりましたので、これにて発表を終わりたいと思います。後藤先生、長年の教育研究生活お疲れさまでした。とはいえ、まだまだこれからも研究を突き進められると思いますので、今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。

報告2　北方研究の立場から―日本人類学にとっての北方研究―　大西秀之

講演 3

物質文化研究の立場から

角南聡一郎
（神奈川大学・准教授）

私に与られたテーマは「物質文化研究の立場から」ですが、本日の後藤先生のご発表の中で使われていた写真にも、私が若い頃に後藤先生にフィールドワークに連れていっていただいた時に撮影されたものもありましたので、そういった思い出話が多くなることはご了承ください。私は物質文化研究の立場から、大林太良と遠藤庄治にフォーカスしてお話しいたします。

■大林太良を知ったきっかけ

そもそも大林太良という人は神話研究者であると私は学生の頃ずっと思っていましたし、2003 年に環太平洋神話研究会が立ち上がるときに、私は台湾の原住民研究に興味があって勉強していたものですから、そこで仲良くなった神話学者・宗教民族学者の山田仁史さんといろいろな話をしていました。そのときに、「後藤先生が今度京都の同志社女子大にいらして、環太平洋神話研究会を立ち上げようと思うから角南さんも来ないか」と誘ってくださったわけです。その理由として、後藤先生は考古学者としても民族考古学の中でも有名な業績をたくさんお持ちだから、良い機会ではないかということでお話を頂きました。最初私は、神話と聞いて少し腰が引けたと言いますか、神話など全然知らないし、考古学と神話はあまり関係ないのではないかと思ってしまい、どうしようかと迷った記憶があります。でも、その研究会の第 1 回目が同志社女子大の今出川キャンパスで行われて、後に南山大学に行かれる加藤隆浩先生とか花園大学の丸山顕徳先生などと共に参加させていただいて以来、途中から面白くなってしまい、私は行ける範囲でずっと神話の研究会に参加させていただいていました。

山田さんを通じて、自分は神話的なものにも少し興味を持ち、大林太良という人をもっと勉強してみようかと思ったわけですが、その中で、大林太良は考古学をかなり踏み込んでやられていて、物質文化というものもかなり研究調査をされているということを知りました。私が山田さんと知り合ったときは既に大林は亡くなっておられて、直接会うことはなかったのですが、分布図に非常にこだわっていたという話も聞きました。それがどうしてなのかは、山田さんに聞いても詳しいところは分からないということだったので、自分なりに考えてたどってみたことがあります。

それが今月南山大の論集という形で出されるようですが、実は人類学・考古学における「大きな理論と現場の理論」という共同研究でした。これに後藤先生も私も山田仁史さんも参加していました。思えば南山にお邪魔するのは、山田さんと最後に対面で会った、2020 年 1 月 26 日の共同研究会に参加して以来です。そのときも中尾世治さんたち

と一緒に飲みに行って楽しかった覚えがありますが、そうしたことの成果として、大林太良の物質文化論について分布図を中心に考えてみました。それはモノもそうですし、神話も類型化して、それを空間的な広がりで示していくことは非常に共通していて、これを比較するための基礎的な作業だということです。

■ドイツの神話研究は大林にどのような影響を与えたか

ベリョスキンはロシアの神話学者ですが、分布図（distribution）を非常に多用して現在も論文を発表しています。山田仁史さんとも交流がありました。そういうところとモノとの関係ということを考えてみると、分布図は非常に関係が深いのではないかと思います。考古学の場合、分布図は当たり前のように勉強します。ドットを落としてまず分布図を作っていきますが、その教科書的なもので、考古学における遺物の分布図はいつから始まったのかを確認すると、やはりドイツに関係しています。ドイツのフォスという人が、初めて土器形式の空間的な分布図を作りました。遺跡の現場の平面図なのだそうですが、類型化したものをドットして1900年に発表されています。

それをより広範囲に、ゲルマン民族と結び付けて遺物の類型をヨーロッパの中にドットで示して行ったのが、よく知られているようにグスタフ・コッシナです。コッシナの分布図は居住考古学としてよく知られているし、ナチズムとの関係で批判を浴びた負の歴史がありますが、分布図はやはりドイツの中で発展していきます。

そもそもこういったものは考古地理学に根があり、地理学的なものから出ています。人文地理学の祖はドイツのラッツェルで、彼は19世紀の終わりぐらいに分布図を使って文化と地理的な空間の変異を説明することを始めた人です。一方ラッツェルは、地理学とは別に『民族学』（Ratzel 1894, 1895）という本も書いていて、その中では、それぞれのエリアの中でどういった特徴的なものを使っているか説明しています。ですから、地理学の影響が考古地理学という形で広まっていったことがたどれるのではないかと思います。

ウィーン学派の人たちも神話の研究で有名ですが、物質文化の研究もかなり推進した一派です。フロベニウスは神話研究者として有名で、彼の説話の分布図は大林太良も頻用しています。さかのぼると、フロベニウスは鞴（ふいご）の羽口の分類をしたものを分布図で示すといったことをやっています。地理学からの影響なのですが、物質文化と神話を同じように、空間的な差異と類型化したモノがどのように関係しているかを示しています。それが同じ起源を持っている可能性があるのではないかと思います。

大林太良はドイツに行ってこういうことを学んできました。フロベニウスなどの影響を受けていると私は思うのですが、その辺を後藤先生はどうお考えなのかと思っています。また、ロシアのベリョスキンが旧ソビエトの体制下で国外に行けないので民族誌的なデータを基に分布図を作っていたということですが、そこにドイツの影響との関係、フロベニウスの影響もあるのではないかと思ってしまうのですが、先生はどのようにお考えなのか、もしお考えがあれば教えていただきたいと思います。

実際、山田仁史さんは、「パレオアジア文化史学（文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）、平成 28 ～ 32 年度」というプロジェクトの中で書いた、「東南アジア古層の神話・世界観と竹利用」で、大林とベリョスキンを引いて、神話と物質文化の関係についてリンクさせた論文を書いています（山田 2020）。このように物質文化と神話研究は、類型化と分布図ということでリンクしていくのではないかと思われます。

■遠藤庄治の調査をどう活用するか

もう一つのトピックは、後藤先生が実際のフィールドワークを学ばれた遠藤庄治の調査についてです。私も実際にそれに参加させていただきいろいろと教わった一人ですが、私も遠藤庄治がどういう人かあまりよく知らず、山田仁史さんに聞いたことがあります。すると「説話系の研究会でも、学会の一番前に陣取って聞いている先生だよ」と言われました。さかのぼって遠藤庄治の文章を見ていくと、「地域史と民話」の中で地域史をどのように掘り起こすかということに関する文章があり、その中に、民話というものが非常に重要だと言うために、有形の文化と対峙させて無形の伝承文化をどう位置付けるか書かれているところがあります。こういったことを考えておられたということで、今日後藤先生が示された写真は、沖縄の民具研究を本格的にスタートさせた上江洲均と、無形の伝承文化を掘り起こそうと尽力された遠藤庄治の関係性の非常に象徴的な写真（P. 25、図 13）だと思います。「この話は、今聞いておかなければ話者が話してくれる可能性がなくなってしまう」と、かなりたくさんの話を採話されています。これらを遠藤の死後、NPO 沖縄伝承話資料センターが整理しました。後藤先生には、遠藤が中心になって集めてられた貴重なデータをこれからどう活用していくのが一番良いのか、お考えがあれば教えていただければと思います。

■「民具」とは何か

神奈川大学には日本常民文化研究所というところがあり、私も所員をしています。これは、「民具」という言葉を命名した渋沢敬三がつくった、今から102年前にできたアチック・ミューゼアムが前身となっています。ここで集められ、日本常民文化研究所が持っていた民具は、今、国立民族学博物館に収蔵されています。この中には旧植民地の台湾や朝鮮半島の民具も入っています。

民具というと何か内向きのような、フォークロアの場合は非常に日本に限定的なイメージになりがちです。しかし実際、今は名古屋もそうですし、私が住んでいる横浜も、外国人が地域住民になってもおかしくない時代になり、ルーツが違うけれども今は日本国民であるということは全く当たり前の時代です。「日本伝統の」とか「日本だけの」ということにこだわることも一つ意味はあるとは思いますが、今、民具といわれると、学生たちは、「博物館や資料館にあるもので、自分たちは使ったこともないし縁がないものだ」と思いがちで、実際そうです。それをいくら教えても実感が湧きません。では、彼らにとって身近な民具は一体何だろうかとなると、より広い概念でものを見ていかないと駄目だろうということで、物質文化あるいは現代民具という言葉の方がしっくりくるような感じがします。

もう一つは国際性です。今日も後藤先生がハワイで日系移民の墓標を調査研究されたことの中で、言語文化と物質文化、生態学と形態学という分類をされていました。常民文化研究所のブランチに非文字資料研究センターというところがありますが、文字資料に対して、民具、物質文化だけではなく、身体技法や絵画や写真なども含めたものを非文字資料と呼んでいます。そういった考えに近いような気がします。ですから、ブラジルのレジストロ市サウダーデという墓地に日系人の墓が600基ほどあるのですが、私も後藤先生のハワイでの実践に倣い、それらを一つ一つ調べてデータベース化しました。キリスト教徒なので十字架をかたどり現地化しているものもあれば、仏式を保っているものもあります。ここでも先生がおっしゃったように、2世、3世となると漢字が読めないので漢字からポルトガル語になっていくといった変化があったりして、紀年銘の話もまさにそうです。勝ち組・負け組はブラジルの場合もあるわけで、沖縄から移民した人も多いです。そのようなことを自分自身も経験することによって、後藤先生が考えてこられたことを追従することで、さらに考えるきっかけを得ました。

このように海外との関係を考えると、このコロナの時代、ウクライナの戦争でもそうですが、いくら離れていてもどこかで起こったことはつながっているということは痛いほどよく分かったと思います。2023年の令和の時代に、物質文化研究というより、われ

われ日本常民文化研究所として後藤先生にお伺いしたいのは、民具という言葉です。現代の民具として対象とすべきものを一体どうしたらいいのか見えない状況です。私はこれを物質文化というように広く見るべきだと思っているのですが、また違ったお考えがあればお教えいただけたらと思います。

講演 4

オセアニア考古学の立場から
―世界遺産「タプタプアテア」と篠遠喜彦―

石村智
（東京文化財研究所・無形文化遺産部・部長）

私が頂いたお題は「オセアニア考古学の立場から」ですが、今回は、後藤先生が挙げられた4人の巨人のうちの1人・篠遠喜彦先生のエピソードに焦点を当ててお話をしたいと思います。

お話に入る前に、私と後藤先生との関わりを少しご紹介します。私自身、元々は京都大学の考古学研究室に入り、修士課程に進んだときにオセアニア考古学を自分のフィールドにしました。当時、京都大学霊長類研究所にいらっしゃった片山一道先生がポリネシアで調査をされるということになりました。片山一道先生は形質人類学の先生なので人骨を研究されているのですが、私はそこにくっついていき、オセアニア・ポリネシアの考古学をやるという研究者人生を始めました。それが1999年のことでしたが、外国考古学の中でもオセアニア・ポリネシアというのは非常にマイナーな地域であることは確かですが、先達の日本人の研究者として、篠遠喜彦先生がいて、さらには後藤明先生という方もいるということを、研究を進める上で知りました。

タイミングが良かったことに、2001年に、後藤先生がそれまでいらっしゃった宮城学院大学から同志社女子大学に移られました。私も京都大学にいたので、非常に近いところにいらしたわけです。実際にお会いしたのは多分2002年ぐらいだと思いますが、そこから親しくさせていただき、当時後藤先生が始められた考古学的民族誌研究会に加えていただいたのが始まりだと思います。そのときに大西さんと角南さんがメンバーでいらして、それ以来付き合いを続けています。万葉古代学研究所や神奈川大学の共同研究などを通じていろいろなことをさせていただきましたが、最も大きかったのは沖縄の海洋文化館のリニューアルに関する仕事です。その後もずっと縁が切れずに、現在では科学研究費・新学術領域の「出ユーラシアの統合的人類史学：文化創出・メカニズムの解明（文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）、2019～2023年度）」という大きなプロジェクトでご一緒したり、あるいは考古天文学に関する別の科学研究費でもご一緒したりしています。

話が戻りますが、そのような観点から、私は篠遠喜彦先生のエピソードを紹介しながら、後藤先生の研究をどう位置付けていくかお話ししたいと思います。篠遠先生のさまざまな業績については『楽園考古学』（篠遠 1994）などの書籍の中で詳しく述べられていますので、ここでは繰り返しません。今回ご紹介する篠遠先生の話は、世界遺産のタプタプアテアという遺跡に関するものに焦点を当てたいと思いま

す。

■篠遠先生のタプタプアテア遺跡修復

タプタプアテアは、フランス領ポリネシア、ソサエティ諸島のライアテア島にある祭祀遺跡です。2017 年に UNESCO の世界遺産リストに記載されました。口頭伝承によると、ライアテア島はソサエティ諸島の中でも最大の宗教的中心地で、この島のオポア地区で、タンガロア神の息子であるオロ神が生まれたとされています。そのため、この地区にある神殿、ポリネシア語ではマラエと言いますが、「タプタプアテアのマラエ」が、オロ神の信仰の中心となって、16 世紀ごろには、このオロ神を主神とする宗派がソサエティ諸島の全域に大きな影響力を及ぼしていたといわれています。

このタプタプアテアの研究や、さらにはその遺跡の修復に大きな役割を果たしたのが篠遠先生でした。近年、新たにこのタプタプアテアの遺跡の修復が行われたのですが、晩年になっていた篠遠先生は、この復元に関しては終始批判的な態度を示していました。世界遺産リストへの登録がなされたのは 2017 年ですが、登録のわずか 3 カ月後の 2017 年 10 月に篠遠先生はこの世を去ることになりました。先生がどのような思いでタプタプアテアの世界遺産登録のニュースを聞いたのかは分かりません。しかし、篠遠先生がタプタプアテアでどのような仕事をし、一体何を批判していたのかを振り返ることで、先生がこの文化遺産について果たした貢献を見てみたいと思います。

タプタプアテアは、かつてこの島々の重要な宗教的中心地であったにもかかわらず、ヨーロッパ人がやってきてこの地域が植民地化され、新しくキリスト教がもたらされたことにより、ポリネシア人が本来持っていた宗教が否定されてしまいました。しばらく人々の記憶から忘れ去られていたといわれています。それが 1920 年代に、篠遠先生の恩師であるビショップ博物館のケネス・エモリー博士がこの遺跡を再発見し、その後 1967 年から、タヒチの観光開発局の主導によってマラエの修復が始められました。そこにビショップ博物館が、1967 年から 1969 年の 3 カ年にわたって協力することになり、モーレア島、フアヒネ島、ライアテア島、ボラボラ島という島々での修復プログラムに参画することになりました。このときのビショップ博物館のリーダーを務めたのが篠遠先生でした。1969 年に修復プロジェクトが終わった後も、篠遠先生はフアヒネ島を中心に自身のフィールドワー

クを続けられ、後藤先生の発表にもあったカヌーの発見などに至ります。それが30年以上にわたる篠遠先生のライフワークになったわけです。

■オーセンティシティを守る復元を

タプタプアテアの祭祀遺跡は、マラエ・タプタプアテアという神殿だけではなく、他にもマラエ・ハウヴィリと呼ばれる大型のマラエがあります。加えて、それよりも小規模なマラエや、それぞれ関連したような考古学的な遺構や遺跡が幾つか存在しています。そのうち篠遠先生は、マラエ・タプタプアテアとマラエ・ハウヴィリを加えた四つのマラエに関する修復に携わりました。修復に当たって篠遠先生が採用した方法は極めて注意深いもので、遺構の崩壊を食い止めて安定化した状態にすることに主眼を置きました。つまり、崩れてしまった石材を元の位置に戻し、それを補強するために最小限の処置を行うことにとどめて、推測によって復元を行うことは厳に戒めていました。

実はこうした修復の方針には背景があります。1964年、ヴェニス憲章という歴史的な記念物の修復方針を定めた国際憲章が採択されました。その中には、歴史的建造物を修復する場合には、建設当初の部材をなるべく使うこと、失われた部分を補足する場合は、推測ではなくて科学的に根拠のある復元とすること、新しい部材を使って復元した場合は、それが古い部材と明らかに違うことが分かるように修復することが大事であるといった、保存修復に関する基本的な理念があります。これは現在までも引き継がれている修復の理念です。

ヴェニス憲章が採択された翌年の1965年にUNESCOの諮問機関であるICOMOSという組織が設立されます。これは国際記念物遺跡会議（International Council on Monuments and Sites）と言い、そのアルファベットの頭文字を取ってICOMOSと言います。世界遺産のニュースの中でよく名前が出てくるので聞いたことがある人がいるとは思いますが、世界遺産を登録するに当たって、その遺跡の価値を評価するという重要な役割が与えられた組織です。さらには、既に登録された世界遺産も定期的に保存状態をモニタリングする必要があるのですが、そのときのミッションを派遣するのもICOMOSの役割です。このヴェニス憲章やICOMOSの設立と篠遠先生が遺跡の修復に携わっていたのはほぼ同じ時期に当たります。つまり、篠遠先生が行った修復は、国際的な水準に照らしても非常に高い水準を保ったものであると評価できます。

その後、タプタプアテアの修復は、フランス領ポリネシア政府の考古局によって1980年代から1990年代にかけて継続的に実施されました。1993年になって、当時のフランス領ポリネシアの大統領が、タプタプアテアの修復事業への協力を篠遠先生に要請します。それを受けて篠遠先生は、1995年1月に現地に赴くべくタヒチの空港に降り立ちました。すると、その空港に3人の男が待ち構えていたのです。彼らは、ライアテア島から来た者だと名乗り、篠遠先生に、一刻も早くライアテア島に来てタプタプアテアのマラエの修復の様子を見てほしいと懇願しました。彼らによると、考古局が行っていた修復作業はめちゃくちゃなもので、そこにはマナが存在しないと言うのです。マナというのは、ポリネシア人が伝統的に信じている超自然的な力で、遺跡に宿る力なのですが、そういったものがもうないのだと彼らは言ったわけです。このときに篠遠先生は、ライアテア島での修復が既に考古局の手によって完了してしまっているということ、そのことについて自分は何も知らされていないことを初めて知りました。

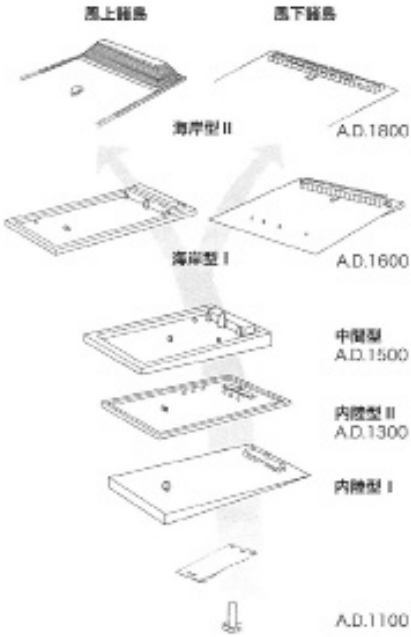
驚いた先生は現地に向かってその様子を見たわけですが、幸いなことに、マラエ・タプタプアテアの方はほぼ手付かずの状態で残されていたのですが、マラエ・ハウヴィリなど幾つかの遺跡に関しては既に修復が終わっていて、しかもそれが遺跡のオーセンティシティを損なうような不適切な手法でなされていたことを目にします。オーセンティシティというのは、日本語では遺跡の真正性と訳すのですが、それを確保するためには、ヴェニス憲章でうたったような、オリジナルのものを尊重し、推定による復元をしないということが重要になってきます。世界遺産に登録されるときには、オーセンティシティを保っているかどうかが大きな評価のポイントとなります。

中でも問題だったのが、マラエ・ハウヴィリの修復です。篠遠先生によると、このような形のマラエはソサエティ諸島の中では歴史上存在したことがないというのです。この遺跡を見ると、「アフ」と呼ばれる石灰岩の板石で築かれた祭壇が海側にあり、その前面に広場が広がっていて、それを取り囲むように壁のようなものが巡らされています。その壁の一部には入り口のような部分が開いています。

マラエの形式の歴史的な変遷を示した図を見ると、板石を持つアフと呼ばれる祭壇が築かれるマラエは海岸部に特徴的な形式で、それには周壁が存在する例はないと考えられています。例えば風下諸島側の海岸型Ⅰのタイプでは、アフがあって周壁がありません。一方、周壁を持つタイプもあることはあります。内陸型Ⅱには周

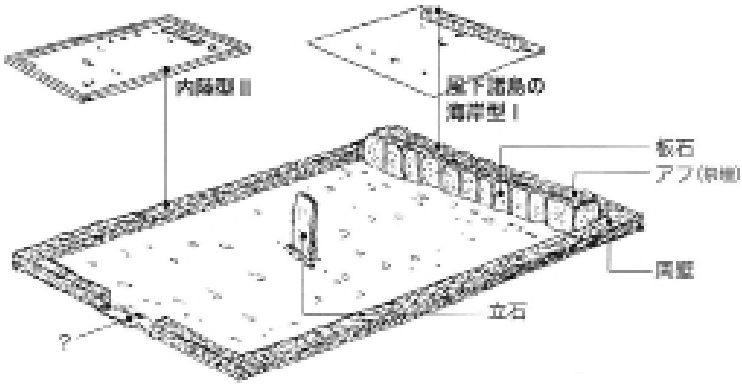
壁がありますが、板石による祭壇はありません。復元されたマラエ・ハウヴィリは、風下諸島側の海岸型Ⅰと内陸型Ⅱの特徴を組み合わせたような形になっています。しかも、内陸型Ⅱは周壁が巡らされているのですが、マラエ・ハウヴィリにあるような入り口のようなものはないのです。つまり復元されたマラエは、歴史的には存在しないことが明らかであると篠遠先生は主張されています。（図１，図２）

篠遠先生が実際にこの修復を行った考古局のスタッフに聞き取りを行ったところ、「発掘調査の結果、広場を取り囲むように壁の



マラエの形式の変遷図
出典：Sinoto 2001 Fig. 5

図1　マラエの形式の変遷図



復元されたマラエ・ハウヴィリの模式図
二つの異なるマラエの形式の要素が混ぜ合わされたものであることがわかる。出典：Sinoto 2001 Fig. 12a

図2　復元されたマラエ・ハウヴィリの模式図

図１・２出典：石村智2019「世界文化遺産と考古学」『季刊民族学』169：76-83

基礎のような遺構が見つかった」ということでした。確かに、海岸部の形式のマラエが成立する過渡的な様相として、周壁の基礎のみが築かれるという例があり、そういった事例はフアヒネ島のマエヴァというところに存在するそうです。しかしその場合でも、基礎の部分だけが築かれ、壁自体が築かれることはないと言います。実際にマラエ・ハウヴィリに関しても篠遠先生は1960年代に修復を行っているのですが、修復に伴う調査でも、全く壁のようなものは存在しておらず、その痕跡すらなかったと言うのです。こういったこともあって篠遠先生は、マラエ・ハウヴィリの復元に関して、少なくとも周壁には科学的根拠がないので取り除くべきであると主張しました。しかしながらその意見は受け入れられることはなく、今もなお壁がある状態で復元されたものが存在しています。

復元とオーセンティシティの問題を考えるに当たり、ある遺産が世界遺産リストへの登録の申請がなされたときに、その遺産がオーセンティシティを保っているか否かが極めて厳密に評価されます。もし仮に科学的根拠に基づかない復元がなされていた場合は、登録が認められないのが一般的です。しかし、そういった評価を行うのはUNESCOの諮問機関であるICOMOSです。

では、ICOMOSはこのマラエ・ハウヴィリの復元をどのように評価したのでしょうか。ICOMOSが世界遺産委員会に提出した報告書によると、現地で修復を巡る議論があることを確かにICOMOS側が認識しています。そのため、2016年10月3日付でICOMOSはフランス政府に対し、修復に対する追加の情報を提出するよう要請しました。それを受けて、フランス政府は11月7日に追加情報のレポートをICOMOSに提出しました。

フランス政府によるレポートでは、このマラエが復元されたような形で過去に存在したか分からないことは認めており、アフが建てられた時点で周壁はなかったかもしれないということも認めています。また、復元したマラエの形の是非に関しては、住民に賛否を問うワークショップを数回にわたり開催したのですが、意見が割れたままであると報告しています。

これを受けてICOMOSは、マラエ・ハウヴィリの復元は性急で、あまりにも軽はずみであったと指摘し、他の復元案に関しても引き続き検討するようにフランス政府に勧告するレポートを書いています。しかしICOMOSは、この復元は遺跡のオーセンティシティを損なっておらず、世界遺産リストに登録する上で問題にならないという評価を最終的に下しました。ICOMOSの報告書は複数の匿名の評価者によっ

て作成されるので、なぜこのような結論に至ったかの詳細は分かりません。しかしながら、いったんタプタプアテアが世界遺産になってしまい、現在観光客が復元されたマラエの姿を見ることによって、この復元にある意味お墨付きが与えられてしまうことが危惧されます。

この修復だけではなく、篠遠先生はソサエティ諸島でさまざまな遺跡の修復に携わってきたのですが、近年になり、そういったものを否定する動きが出てきています。フアヒネ島には水の上に立っているミーティングハウスがありました。ハリケーンによって一度壊れてしまい、その後現地の政府が建て直したのですが、それはコンクリートで建てられた、オーセンティシティに配慮していない復元になっています。そういったむちゃくちゃな復元はあちこちで行われていて、それは篠遠先生がこれまでやってきた科学的根拠に基づいた復元を否定する形になってしまっています。

こういった背景には現地の政治的な問題があるということは篠遠先生自身も気が付いています。ただ、外国人研究者である篠遠先生が他国の文化遺産に向かうときに直面せざるを得ない難しさがここにあると思います。そもそもソサエティ諸島の遺跡は、先住民であるポリネシア人の祖先が残したものです。しかし現実には、この地は現在フランスの領土となっていて、タプタプアテアの世界遺産に関しても、フランスの文化遺産として世界遺産に登録されています。その意味で、非常に政治的にデリケートな問題をはらんでいることは明らかです。その上で、ビショップ博物館というアメリカ合衆国にある博物館の、篠遠喜彦先生という日本にルーツを持つ人が介入してくるということは、非常に難しい政治性をはらんでいることは明らかですし、篠遠先生自身もこの問題に関して非常にセンシティブに感じていたことが、先生の書かれた幾つかの文章からも読み取れます。

しかし、そうしたことを全て分かった上で、篠遠先生はあえて「たとえ私がタヒチから追放されても、タヒチの将来のためには、これらのマラエはあなたたちの祖先が築いたものではないということを私は記録していく」と言うのです。政治的な問題に対しても、あくまで考古学の科学的証拠に基づいて反論を続けていくという、研究者としての非常に真摯な姿に、学者としての矜持を感じざるを得ないと思います。

2014 年にライアテアを訪れた際、現地の人たちからキルトを送られている篠遠先生の写真（図 3）があります。実質的にはこれが篠遠先生の最後のライアテア訪問

です。篠遠先生の業績やお人柄に対して、現地では大きな尊敬の念が持たれていることを示していると思います。

図3

出典：石村智2019「世界文化遺産と考古学」『季刊民族学』169：76-83

■後藤先生のパブリックアーケオロジーの試み

最後に、後藤先生の話に戻りたいと思います。後藤先生のご講演の中でも、篠遠先生はパブリックアーケオロジーを先駆けて行っていたと指摘されています。後藤先生自身もパブリックアーケオロジー的な、人類学の研究成果を社会に還元することに関して非常に多くの力を注いでこられたと思います。その一つは沖縄の海洋文化館のリニューアルであり、十数年前にハワイのホクレア号が日本を訪れたときの事業に関わられたことでもあります。さらに現在は、科学研究費などによって日本全国にプラネタリウムの出張上映を行う、人類学プラネタリウムのプロジェクトもされています。私がご一緒したのは宮崎県の日向市と北海道の標津町、そして佐賀県の吉野ヶ里遺跡ですが、それぞれの地域に特徴的なプラネタリウムのコンテンツを作って見せる試みをされました。例えば北海道の標津町ではアイヌの星座を見せました。また吉野ヶ里遺跡では、弥生時代には南の空のちょうど雲仙・普賢岳の上に南十字星が見えたので、その様子をプラネタリウムで再現しました。このようにそれぞれの地域に合わせたプラネタリウムのコンテンツを開発していらっしゃいます。

こうしたことから後藤先生は、学問の研究と社会との関わり、社会への還元を常に意識されているのだろうと思います。そしてこれは、先生が四人の巨人の一人として尊敬している篠遠先生の足跡、後ろ姿を見ながら取り組まれてきたことではないかと感じています。大学のお仕事は退職されますが、人類学プラネタリウムの試みや日本航海協会で行っている古代の航海の復元の試みには引き続き携われるということですので、今後のご活躍を私も非常に楽しみにしておりますし、私自身もお手伝いできればと思っています。

総合討論

【後藤】 3人の講演者の皆さん、ありがとうございました。いろいろ質問が出て、私も全部お答えできるか分からないのですが、一つ忘れないように言っておきたいのが、渡辺仁さんは「土俗考古学」という言い方を一貫してされました。アメリカではエスノアーケオロジーで、直訳すると民族考古学なので、私も『民族考古学』(後藤 2001)という本を書いているのですが、仁さんは一貫して土俗考古学という言い方でした。仁さんは、国立台湾大学(旧台北帝大)に土俗学というのがあって、台湾原住民を中心に物質文化研究を研究する独立した学科または専攻があったといつも言っていました。もう一つ、オーストラリアのジェームズクック大学に、物質文化研究学科のような独立して物質文化を研究する専攻があると言っていて、それがとてもいいということで、土俗学・土俗考古学という言葉を一貫して使われていたと思います。つまり、物質文化研究が一つのディシプリンになり得る。単なる考古学や民族学の補助ではなく、独立した分野になるべきだと考えられていたのではないかと思います。

仁さんは考古学をやり、生態人類学を提唱し、最終的には人類の進化、『ヒトはなぜ立ち上がったのか』(渡辺 1985)や『縄文式階層化社会』(渡辺 1990)を著されました。『縄文式階層化社会』というのは確かに文化人類学の人は手に取ることをためらってしまうようなタイトルなのですが、実際この本では、アイヌから始まり北方の民族誌を網羅し、カラハリ・サンやアボリジニといった移動型の狩猟採集民ではない北方の定着的な社会を比較しています。彼らに安定した食料、特に漁労、水産資源があったことがこのような狩猟採集社会を生み出したことを仁さんは強調しています。水産資源とはサケ・マスのことですが、それが安定的な社会を生み出し、定着もしたということです。仁さんは別途、竪穴住居の研究もし、北方文化研究施設などに長大な論文を書いています。民博の『国立民族学博物館研究報告』にも書いていたかと思います(渡辺 1988)。北方民の住居の特徴が定着的な生活とどのようにリンクするかを膨大の民族誌データで論じています。

一方で、食文化(food habit)の論文も『民族學研究』(日本文化人類学会)に発表されています(渡辺 1978)。これは南方から北方、つまり熱帯域から寒帯にかけての狩猟採集民の食文化のスペクトラム的な変化を示し、その中で北西海岸の北方民やアイヌ民族がどのあたりに位置するのか、またその中で縄文時代を考えるとしたらどのあたりに位置するのかを見極める方法論を考えていたのだと思います。

さて私が大学に入ったときにテキストとなったオスグッドの民族誌 *Ingalik Material Culture*(Osgood 1970)に話題を移しますが、考古学なのになぜ民族誌を読まされるの

だろうと思ったのですが、後々あの民族誌を仁さんが読ませた意図がわかるようになり、なぜこの民族誌が重要なのか、幾つか論評も書いたことがあります。

後藤 明 氏

今日来ているパネリストの3人とは、京都で行っていた考古学的民族誌研究会でも一緒に熱心に研究した時期があります。考古学的民族誌は、物質文化研究ではありません。考古学的は過去、歴史学は文献の後、社会学は現代といったことではなく、考古学的な視点は現代のわれわれが生きているこの社会にも通用します。考古学の方法論は、民族学や社会学の方法論と違うのではないかということで、まさにおそらく仁さんは土俗学でそういうことを目指していたのではないかと思います。考古学的民族誌が考古学的に社会、近現代社会も描けるということで「archaeological ethnography」「archaeography」という流れがあり、欧米では既に「contemporary archaeology（現代考古学）」といった言い方がされるようになってほぼ物質文化研究と境界がなくなってきてしまっている感じもしますが、そのように仁さんは頭の中で考古学的な切り口を一貫して持っていたのではないかと思っています。

かたや大林さんですが、朝日新聞が大林さんの記事を出すために私もこのシンポジウムの2～3日前にインタビューされて大林さんの神話研究について少し語りました(2023年3月15日朝日新聞夕刊)。改めて大林さんのレビューをしてみると、意外と初期の時代は神話ではないのです。大林さんのドクター論文は、助手時代に出した東南アジアの社会構造論で、親族組織論や親族構造、親族呼称についてのものでした。若い頃は石斧の論文を『物質文化』（物質文化研究会）に投稿していたり（大林 1969)、動物儀礼のことも書かれていて、神話オンリーでは決してありませんでした。大林さんが神話にかなり傾倒していったのはいつごろなのか考えてみると、まとまった著作として『日本神話の起源』（大林 1961）を書いたあたりかと思います。私が大林さんと神話の話しをす

るとすごく楽しそうに語り、生き生きしていました。

大西さんの質問に戻りますが、渡辺仁さんは北方をやっていましたが、日本の南方、とくにニューギニア研究のパイオニアでもありました。そこで育ったのが大塚柳太郎さんです。大塚さんがその後医学部に行って、生態人類学と称してお弟子さんを育てていくわけです。民博におられた秋道智彌さんも、栄養学的な内容でニューギニアに関する博士論文を書いています。その先鞭を付けたのがやはり仁さんです。ニューギニアで大塚柳太郎さんと2人で、ある集落の脇にテントを作って生活を始めたそうです。最初は村人たちから敬遠されていたのですが、あるとき女性が旦那さんから暴力を受けて、自分たちのテントに逃げてきました。下手に治療などして親切にしたらリベンジされるのではないかと心配したけれども、取りあえず手当てをしてあげたそうです。するとその人は帰っていって、旦那と何もなかったように一緒に歩いていていたので「いったいあれは何だったのだろう」と驚いたそうです。そのうちだんだん村人と溶け込めるようになり、調査ができるようになったという話を聞いたことがあります。

仁さんはそこで弓矢の研究をもされていました。*Bow and Arrow Census* (Watanabe 1975) というモノグラフで、この報告書については授業で何度も言っていました。とにかくその村で使っている弓を徹底的に全て調べるという姿勢です。これも、考古資料と民族資料は実は似て非なるものだという考えからです。民族資料は有名な品、代表的な品を持ってきて展示していることが多いのですが、仁さんは考古学的な視点で、弓矢をを徹底的に全部調べたのです。同じ種類とされる弓矢でも、刃の大きさ、矢の大きさ、それはどの動物に使うなどということを徹底的に調査し、それをセンサス (census) と称したのです。まさに悉皆調査です。私はそうした考古学的な視点から、ニューギニアの当時の物質文化を徹底的に調査したのではないかと考えています。

話が少しそれてしまっていますが、なぜ南方へ行ったかというのは、大西さんも言われていましたが、仁さんのモデルには説明要因と説明される要因が渾然一体としているという特徴に関係すると思います。仁さんは、モデルの中に説明が含まれているとして、モデルを常に提出します。そのモデルを南方から北方に漸移的に並べることで人類史が見えてくる。ヒトはなぜ立ち上がったのかという大きなテーマが見えてくるということです。北をやりながら南、南を知らないと北も分からないという視点を持たれていたのではないかと思います。そのような中で、先ほど言及しましたが、南と北のフード・ハビットの違いを『民族學研究』に発表されています (渡辺 1978)。あれはその後、日本の他の研究者も似たアイデアを唱えているのですが、仁さんには言及していないのです。他

にも仁さんのオリジナルアイデアなのにちゃんと言及されていない、ということが多々あります。

仁さんは常に北と南の対比の中で、たとえば『縄文式階層社会』（渡辺 1990）でも、南の方のアボリジニやカラハリ・サンのような遊動的な狩猟民とのコントラストで北方狩猟民の位置付けを考えていて、その中で縄文時代がどう位置付けられるという幾つかの項目を設定しました。先ほど言った住居の安定性や食文化など、考古学的に観察できるような項目を引き出して位置付けていきました。

仁さんが評価する研究者であるダリル・フォードについて言及しましたが。もう一つ、アメリカの人類学の教科書 *Principle of Anthropology*（Chapple & Coon 1942）の著者のチャップル（Chapple）とクーン（Coon）についてもいつも聞かされていました。今でも持っているのですが、この本は世界の民族を幾つかの項目で特徴付けています。その中に刃物が入っているのです。刃物は石器か鉄器か、竹かなどということが書かれています。利器というのは、森を切り開いたり、獣を裂いたり、獲物を取ったりする、人類を考える上でとても重要な道具です。そういうところから人類を見ていくということがとても強調されていました。

加えて、大林さんと仁さんの比較は今後やっていきたいと思っているテーマです。大林さんは神話の研究者というイメージが強いのですが、考古学の社会復元には何が必要かを書かれていて、初期の論文の中ではウェーバーやジュリアン・スチュワード以外に、晩年の著作でも意外にプロセス考古学のルイス・ビンフォードなどを引用しています。社会には、モデルを作ってある程度説明できる部分と、そうではなくてもう少し伝播や歴史的な要因に関わる部分がある。これは、大林さんが学んだドイツ流の歴史言語学のフロベニウスのような、世界的な伝播関係で説明できる部分が総体化して一つの文化が成り立っているという考え方を取っていたのだと思います。私の形態学と生態学の発想の一つには、言語学以外にもドイツの文化形態学というものがあるのですが、それも文化のコンフィギュレーションです。そうした比較もできると思います。

角南さんからの質問に対してですが、「民具」というのは英語に訳せず、神奈川大の常民研と関わるときには、結局英語でもフランス語でも「mingu」と言っています。「People's tool」などと訳したこともありましたが、全然ピンと来ませんでした。私は、強いて言えば「folk artifacts」という言い方がいいのではないかと思っています。アメリカの大学には、人類学とは別にアメリカン・スタディーズというちゃんとした分野があり、その中ではヘンリー・グラッシー（Henry Glassie）による先駆的研究や、例

えばアフロアメリカンのマテリアルカルチャーなど、結構物質文化研究が盛んです。その中で、いわゆる「fine art」ではなく、民衆が使っている人工的なものをfolk artifactsと定義するのが良いと思います。

Folk artifactsには当然大工道具やカヌーや船などが入るのですが、料理は物質文化なのでしょうか。食物も入れている事例も実はあります。私が物質文化論の授業の中で最初に学生に問うことは、例えばケーキやクッキーは物質文化なのかということです。食べてしまったらなくなる。だったら耐久性が問題なのか。食べられる、食べられないが問題なのか。例えばスペインのトマト祭りで投げられている、あのトマトは何なのか。他のお祭でも、お祓いの榊や御幣など、いろいろなものを使うけれども、それとどう違うのか。そのようなクエスチョンを出して、物質文化のファジーな部分を問います。その中で、民具はそれこそ声なき民衆が使っているもので、しかし人間が手を加えたものです。それは道具とするとかなり限定されるので、例えば庭の植木なども含めて考えると、民具はそういうものに近い概念なのかなと私は思っています。

それから、民話を社会に役立てる方法についてですが、これは石村さんの発表にむしろ近いと思っています。沖縄伝承話資料センターは盛んに沖縄民話の会というものを主催していて、各地で沖縄の民話を語って伝え、あるいは語る人を育てています。さらに、海洋文化館を造るときに沖縄伝承話資料センターから民話の提供も受けました。また、元々民話は語ってこそのものなので、ただ文字にしてパネルにすればいいというものではなく、語る人・語り方を伝えることが必要ですし、語ればまた変わっていくこともあります。例えば学芸会やワークショップなどで子どもたちが民話を語ることで、民話もまた新しくなっていくと思います。その中に積極的に関与していくということがあると思います。

少し飛躍しますが、今、ある研究者たちと演劇を人類学に使う試みを行っています。そういうと成果の発表を演劇でやるように捉えられるかもしれませんが、そうではありません。あるいはひとつのメッセージを伝えるのが目的でもありません。たとえば、中国の文化革命時には「ブルジョワ打倒」を意図し、最初威張っていた人が打倒され追放されるような内容を演劇で表していました。それは答え・メッセージが一つなわけです。そうではなく、演劇を調査の手法にしていくという試みを今始めていて、民話を素材として使っています。あるいは、縄文時代を展示している博物館で、毛皮などを着て縄文人の格好をし、縄文人の１日を演じるというものがありました。それは研究成果のわかりやすい発信ということで意義があると思います。しかしわれわれが始めている試みは、

成果の発表のための演劇ではなく、演劇を作るために、劇作家や演出家の方と素材として民族調査共同ですることから始めています。演劇で使われている素材は一つ一つがリアルであるべきだからです。素材リアルだけれどもストーリーはフィクションあるいはクリエーションです。しかしそれによって地元の人を巻き込み、自分たちが意識していなかったいろいろな過去のことなどを思い出すことで、語りが生まれ、さらに村の人がその演劇を見てコメントをします。籠の背負い方がおかしい、あの踊りは別の村のだ、などといった批判も出ます。しかしそのことによって、民俗的知識あるいは在来知を一度意識に上らせ、演劇で表現することで、自分たちの立ち位置を改めて考えてもらう、というより、一緒に考えるといった方がいいかもしれません。これは私が各地で試みている人類学的プラネタリウム、アンソロポリウムの試みも同じ方向性をもっていると思います。そのような仕掛けをした結果として子どもたちや若い人が興味を持ち、自分たちの文化や歴史を学ぶことになります。プラネタリウムだと、解説担当のこどもさんが昔の話を聞くために、おじいさんと話したという人もいたので、あらなたコミュニケーションがうまれるきっかけを仕掛けていく素材なのかなと思います。

演劇にしろ、プラネタリウムにしろ、単に何か成果を表現する手法と取られがちなのですが、そうではなく、常にオンゴーイングな他者とのインタラクションの手段だと思っています。石村さんが発表された篠遠さんが目指したことも、多分そういうことではないかと思うのです。遺跡を保存して終わりということではなく、そこで生きていく人がいるのだから、その人たちが遺跡や環境、あるいは他者とインタラクトしていくような場として遺跡を常に活用していかなくてはいけないという意識を持たれていたと私は思います。

大西 秀之 氏

【大西】 特に準備していたわけではないのですが、オンラインを含めてせっかくこれだけの方々がいらっしゃるので、ディスカッションのためにわれわれ三人から簡単なリコメ

ントをしておきたいと思います。私からは三つあります。

今日の私の話の構成を踏まえ、まず学説史のところから話をすると、なぜ渡辺仁が文化／社会人類学を含めた生態人類学で十分継承されていないのかというと、まさに研究者育成が反映していると思います。渡辺仁が理学部人類学で教えた研究者は五名しかいません。私は偶然その五名の方々と面識があるのですが、そのうち四名がオセアニア、東南アジア、アフリカを対象として業績を積んでいます。北方研究に従事したのはたった一名です。これはお名前を出しても全く問題ないと思うのですが、北大の北方文化研究施設の人類学部門にいらした煎本孝先生です。煎本先生は、残念ながら積極的に生態人類学会には関わっておられませんでしたので、渡辺仁の学問の継承が同学会で行われませんでした。そういった意味で、意図せず「王殺し」が起きてしまったというのが、後藤先生のコメントに対するリコメントです。

次に理論的な話ですが、大林太良と渡辺仁は、どちらも構造論的・システム論的思考とひとまとめにしましたが、あえて日本の大学の悪い伝統での表現になるのですが、文系と理系の思考の違いがあると思います。具体的に何かというと、大林太良の場合は要素から構造を抽出しようとしました。まさにレヴィ・ストロース的な考え方で、「このような要素を見ていくと、このような構造が浮かび上がる」というものです。こうした大林に対して、渡辺仁は分析から説明に至るまでの準備として、始めからモジュール化された分析・説明の理論体系を設定していました。「この要素をこう当てはめたら、このように説明できる」という形の説明原理・方法です。生態学的なエコシステムも、基本的には同じで、先にもう結論は想定されているのです。「物質循環のエコシステムがこうある。そうすると、C（炭素同位体）やN（窒素同位体）あるいはDNAをトレース追跡して行くとこんな結果が出るだろう」というような想定です。このように、二人の思考には、文系と理系に象徴される違いが、かなり顕著に現れている、と言えるのではないかと個人的に思っています。

最後に一点、新しく付け加えたいことを述べます。今日の話を通して、特に私の立場上、民族誌を中心とされる文化／社会人類学系の方に語りかけたいのは、今現在、民族誌研究が直面している課題についてです。その課題とは、簡単に言うと、近年ジェームズ・スコットが *Against the Grain*（Scott 2017）を刊行したり、*Bullshit Jobs*（Graeber 2018）で有名なデビッド・グレーバーが *The Dawn of Everything*（Graeber & Wengrow 2021）を書いたりしている背景です。これらの著述は、まさに民族誌研究から提示された、ジャレド・ダイアモンドの『銃・病原菌・鉄』（ダイヤモンド2000）やユヴァル・ノア・ハ

ラリの『サピエンス全史』（ユヴァル 2017）などに対抗しうる内容となっています。本来ならば、民族誌研究からもっとダイヤモンドやハラリの著作に、異議申し立てが出されるべきと思います。ただ『年報人類学研究』（南山大学人類学研究所）で、今年われわれが企画させていただいた特集でも指摘したのですが（大西 2022）、人類学の研究領域ではこれまでこうした話題が語られてきませんでした。

角南 聡一郎 氏

しかし昨今、最前線の研究領域では、民族誌の知識を文明や人類が直面している問題に用いて、改めて取り組まないといけない、と認識されだしています。ただ僭越ではありますが、まだ日本の文化／社会人類学、生態人類学も含めた領域から、ダイヤモンドやハラリに対する本格的な異議申し立てなどが出てきていないのではないでしょうか。これに対して、もう世界の人類学では、スコットやグレーバーの著作に見られるように、とっくに認識されている課題ではないかと思います。例えばアクターネットワークのブルーノ・ラトゥールしかり、フィリップ・デスコラしかり、そういった文明や人類のあり方を問うような大きな物語を、もう一度改めて人類学は仮構していかないといけない、という認識が共有されているように思います。民族誌という空間軸を拡張して、世界システムが語られるようになったように、今度は時間軸を拡張して文明論や人類史という人類学が過去に棄却したテーマに改めて取り組まないといけない、そんな過渡期にあるのではないかと個人的に思っています。そういう意味でも、今日の後藤先生のお話は、未来の人類学が向かうべき方向性にも開かれているのではないかと思いました。

【角南】 これは私が発言していませんでしたが、渡辺仁の研究に関しては理学部と文学部の交流というか、元々総合人類学から始まったという痕跡が実習に残っていました。頭骨を計測することを文学部の学生も実習でやっていたし、逆に発掘をするなどといったことが、渡辺の頃のまだ理学部と文学部の交流のようなものがあった時代なのかなと

石村 智 氏

思いながら伺いました。総合地球環境学研究所のラオスプロジェクト（「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005」2003 ～ 2007 年 度　代表：秋道智満）の関係で、後藤先生に東大の考古学研究室に連れていっていただいて、資料調査をしました。確かそのときも、考古資料と渡辺が持って帰った民具の弓の両方あって、東南アジアの大陸部にも渡辺は調査に行っているということも付け加えておきたいと思います。

また、後藤先生が民具の話の中でご紹介されたヘンリー・グラッシーは、インディアナ大学のフォークロアの人脈の中にいる人だと思うのですが、彼については断片的な抄訳のようなものが出ているだけで、日本の民俗学の中ではまだきちんと紹介されていないのは問題ではないかと思います。アメリカは移民社会ですから、日本人の私から見ると、自分の母国というか、移民の物質文化をやっているような感じにも見えます。

【石村】 民具の話の中で、食べ物は民具なのか、という話があったと思いますが、有形（tangible）と無形（intangible）の対比の話を思い出します。例えば和食が UNESCO の無形文化遺産になっているのですが、確かに和食という調理法は無形のものですが、出来上がった食べ物自体は有形ではないかと思います。無形文化遺産として考えられている工芸技術に関しても同じようなことが言えます。工芸技術自体は無形の技ですが、最終的に出来上がった作品は有形です。

実はこれは、文化財保護法の中で無形文化財が初めて定義されたときから出てきている問題で、当時文化庁の前身であった文化財保護委員会の中で座談会が行われ、「民藝」のドンであった柳宗悦も、結局作品そのものは有形ではないかというようなことを言っています。そのあたりが、有形と無形は渾然一体となっているという特徴を示しているところです。伝統芸能であれば完全に無形のものと思うかもしれないですが、伝統芸能

を行うためには、そこで使われる楽器や衣装といった有形のものが必要です。そしてその衣装や楽器を作るのは職人の技は無形のものなのです。だから有形と無形というのは、限りない入れ子状態になっているのです。

なぜこの話をしたかというと、後藤先生は元々考古学者でしたが、人類学の方にキャリアを進められたからです。今日集まった3人も元々は考古学者だったわけですが、大西さんは社会人類学、角南さんは民俗学、私自身は無形文化遺産、ということで、最初は有形から始まったものの、今では無形的なところに行って仕事しています。後藤先生を含めたわれわれ4人は、無形なものを見ていく中でも有形なものを常に意識しているということは、自分でも思いますし、後藤先生をはじめ大西さんや角南さんの仕事を見ていてもそう思います。こうしたところが後藤先生の学問的な特徴を表していますし、4人の巨人として挙げた人たちにも共通するのではないかと思いました。

【後藤】 先ほど言い忘れましたが、仁先生は東大の主任だったときにラオスの調査を始めました。たまたま仁さんが科研に書いた書類があり、当時はワープロなどなかったので手書きでたくさん書いて、結構大きな科研を取っていました。予備調査をやったけれども、残念ながらベトナムから飛び火した共産革命が起こってしまい、できなくなりました。ラオスの調査をやったのは、ニューギニアで生態人類学的な弓矢の研究をしていたからです。弓矢の研究は実は副産物で、本当は生態人類学の研究に行く予定だったのですが、たまたま弓矢が面白かったから弓矢をやったと、仁さんははっきり言っています。調査にはそういうことがたくさんあって、「行ってみたらこれが面白そうだったから、結局そちらになってしまった」という話はいくらでもあります。

弓矢のモノグラフ *Bow and Arrow Census in a West Papuan Lowland Community* (Watanabe 1975) は私のハワイ大学時代の先生のバイオン・グリフィン (Bion Griffin) というエスノアーケオロジーの大家がすごく評価していて、仁さんがミシガン大学から日本に帰るときにハワイの私のところに寄ったのですが、ハワイ大学に連れていったら、グリフィン先生が本を持ってきてサインをしてもらっていました。グリフィン先生は *The Ainu Ecosystem* (Watanabe 1972) と *Bow and Arrow Census in a West Papuan Lowland Community* と両方持っていて、「すごい人が日本にいるのだな」と言っていました。

ニューギニアではそういう研究をしたのですが、ラオスに行ったのは、渡辺仁さんは元々北方の石器のことをやっていたからです。日本の考古学者が完形品しか見なかったのに、わざわざ剥片などを全部もらってきて、石器の製作システムなどを見た。これが渡辺さんの活動系の概念になるのですけれども、そういうことをしたということをいつ

も授業で聞かされていました。「北方の方は、石刃技法やマイクロブレードの技法が発達する。一方、南方は、あまり定型的な石器がない。チョッパーのチョッピングツールの東西対非というという古い議論があるが、その中で、東南アジア大陸部の石器文化を自分で明らかにしたい」ということでした。ラオスの少数民族がいる地域で調査を始め、民族考古学的な調査もやろうと思っていたのかもしれません。ラオスで自分がやってきた北方と南方の軸を一つ作りたかったのではないかと思います。特に南方世界だと石器があまり発達せず、その代わりの利器は何だったのかが大事になります。南方では石器が出ないのは竹などを利器に使っていたからという議論が今でもありますが、そうしたことを自分で確認したかったようです。南方における利器というのはどういうのだったのかついては盛んに議論されていましたが、民族考古学も含めて明らかにしたかったのかと思います。なぜラオスになったのかはよく分かりません。たまたまラオスが当時は考古学的にも民族学的にも未開拓地帯だったということもあるのでしょうか。それでラオスに焦点を定めて行こうと思ったのだと思います。

【大西】 直接、秋道智彌先生から聞いた話なのですが、渡辺仁先生がラオスに行ったのは非常に簡単な理由で、石灰岩の洞窟があったからだそうです。石灰岩の洞窟なら古人骨が残っているのではないか、という期待があったとのことでした。また、今でこそアジアにはネアンデルタール人が居なかったことが明らかになっているのですが、当時はいわゆる旧人レベルの存在がアジアで確認されていなかったので、その古人骨や彼らの持っていたルバロワ石器を探し求めようとしたということでした。ちなみに、これは私も入っていた新学術領域研究「パレオアジア文化史学」（文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）平成 28 ～ 32 年度）の前史にもなっていて、東大の理学部人類の系譜を受け継ぐ赤澤威先生や西秋良宏先生の研究実践につながっているところが面白いと思います。

【後藤】 フロアで何かコメントやご質問のある方はどうぞ。せっかくいらしているので、中生勝美先生。

【中生勝美】 桜美林大学の中生です。コメントとして、皆さんやはり考古学なのだなということをつくづく感じました。私はいくら考古学のものを読んでも、モノに関心がないもので、どうしてもそこから先に行けないのに、どうして皆さんはそこから入ってこられたのかお聞きしたいです。特に後藤先生、お願いします。

【後藤】 どうしてと言われてもなかなか難しいのですが、私はものを考える上で、具体的なものがないと考えづらいという性格があるのかもしれません。学生時代に沖縄の

鳩間島や与那国島に行って文化の違いに感動し、それで自然に人類学畑に入ったのですが、そのきっかけは例えば沖縄のお墓だったり、自分も漁師と一緒になって銛で魚を突いたりした実体験があったことでした。今思い出しましたが、国分直一先生らが書いた『南島先史時代の研究』（国分 1972）という本があります。この本を沖縄に行くときに熟読して持っていきました。そこには言語学や民族学などいろいろな論稿があったけれども、一番分かりやすかったのが国分先生の南島の考古学の論稿なのです。だからそういうところから、分かりやすいということで入っていった気がします。

【中生】 ありがとうございます。後藤先生とは台湾の蘭嶼島に一緒に調査に行き、先生をバイクに乗せて島中を回ったことがあるのですが、あそこはまさに鹿野忠雄さんがすごく調査されていて、非常に後藤先生の研究に近いというようなことをおっしゃっていました。あのときは聞き流したのですが、ちょうど次の年かに学生を連れていったとき、「これで木を削るんだよ」と打製石器を目の前で作ってくれたのを見て、やはり本当に考古と民族は分けられないなと感じたことがあります。どうもありがとうございました。

【後藤】 クネヒト先生、先生は仁さんもご存じでしょうか。大林さんは少なくともご存じかと思いますが。

【クネヒト・ペトロ】 今日の話を聞いて、やはり人類学をやってきて良かったと思いました。私が日本に来てから 60 年ほどが経ってしまったのですが、もちろんその間に学問はいろいろな面において変わってきたのですけれども、おそらく最も変わった一つが人類学だと思います。昔の見方と現在の見方はかなり違います。恥ずかしいのですが、例えば『文化人類学研究』（日本文化人類学会）という雑誌を読むと、若い人たちが何を言っているのかよく分からないことがだんだん多くなってきました。自分がどこかで時間的に止まってしまった感じなのです。もちろん、学界から離れてしまったためにそうなった可能性もあるとは思います。

もう一つは、私は今、ある人の本の書評を書かなければならないのですが、それは人類の歴史を基にしてある概念を追求している内容です。その概念というのは生命のようなものです。ご存じのように、生命は今、科学の側面において議論されていて、実に面白い議論がたくさんあります。しかし人類学の方では、そうしたものはむしろ当たり前のように捉えられています。DNA などだけではなくて、人がどのようにそれを考えているかということです。例えば私たちが社会研究をするか考古学を研究するか、それは全部ヒントになるのですが、その説明は私たちによる説明で、現代において、現在の考え

方で決定されるものです。だから、私たちがどこまで一般的に認めてもらえる結論を出せるかがよく分かりません。むしろそれに関しての自信がだんだん薄くなってきました。

しかし今日の話を聞いて、このように一つのテーマについてさまざまな視点から見るというのは、一番学問的ではないかと思いました。後藤先生をはじめ、皆さんにお礼を申し上げたいと思います。非常に刺激的でした。ありがとうございました。

【後藤】 ありがとうございました。渡辺仁さんがよく言っていたのは、石器の形を見て「これは古い」などという議論もあるけれども、「こんなのはアメリカのインディアンは最近まで作っていますよ」というように、やはり考古学は古いものだけをやる研究ではないということです。仁さんはそれを突き抜けた視野を常に持っていました。私は考古学に進み、最初からそういうことを言われて民族誌を読まされました。最初は多分編年などの研究を読まされると思うのですが、私は出発点からそういう形だったのです。

でもやはり仁さんも土俗学を重視していたし、大林さんも実は物質文化がすごく好きだったので、モノの研究というのは自然に自分の一つの柱になっています。言語文化も、神話も遺物も物質文化も自分にとっては同じものだと思っているのです。結局分析する方法も視点も同じです。実は大林さんなどもそういう方法を取っていたのではないかと思います。大林さんは要素から構造で、仁さんはむしろモデルがあってそれに要素を当てはめたと、大西さんが先ほど上手にまとめていました。確かにそういうコントラストはあると思うのですが、2人が追求していた人類史は正直言って、クネヒト先生が言われたように人類学なら常に考えておきたいものでした。なかなか今そういう人がいなくなってきましたが、学問の最初に影響を受けたお二人がそういう方だったので、まだ十分受け継いではいませんけれども、自分はそういう視点をどこかで持って行きたいと思います。

参照文献

＊編集委員によって作成したものです。

（日本語文献）

秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎（編）

1995 『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社。

秋道智彌・印東道子（編）

2020 『ヒトはなぜ海を越えたのか：オセアニア考古学の挑戦』雄山閣。

朝日新聞

2023 「(時代の栞)「神話学入門」1996 年刊・大林太良世界の始まりの物語、各地から」3 月 15 日夕刊 2 面。

石田英一郎・泉靖一（編）

1959 『世界考古学体系 第 15 巻 アメリカ・オセアニア』平凡社。

石村智

2019 「世界文化遺産と考古学」『季刊民俗学』169:76-83。

植木武（編）

1996 『国家の形成 人類学・考古学からのアプローチ』三一書房。

大西秀之

2022 「民族誌による文明理解の可能性－民族誌フィールドにおける時空間の拡張－」『年報人類学研究』13:20-36。

大林太良

1961 『日本神話の起源』角川書店。

1969 「東南アジアにおける斧の着柄法」『物質文化』14:30-42。

1990 「神話 4300」『国立民族学博物館研究報告書別冊』11:150-157。

1991 『北方の民族と文化』山川出版社。

1995 『北の神々南の英雄』小学館。

1997 『北の人 文化と宗教』第一書房。

1999 『銀河の道・虹の架け橋』小学館。

大林太良（編）

1984 『《民族の世界史》6. 東南アジアの民族と歴史』山川出版。

岸上伸啓（編）

2018『はじめて学ぶ文化人類学：人物・古典・名著からの誘い』ミネルヴァ書房。
国分直一
1972 『考古民俗叢書 10　南島先史時代の研究』慶友社。
後藤明
1997 『ハワイ南太平洋の神話―海と太陽、そして虹のメッセージ』中央公論新社。
2001 『民族考古学』勉誠社。
2002 『南島の神話』中央公論新社。
2006 「ことばの考古学－大林太良･遠藤庄治という二人の巨人の思い出から－」『追悼　遠藤庄治－沖縄の伝承話研究と教育に捧げた生涯－』NPO 法人沖縄伝承話資料センター（編）、pp. 50-52。
2023a「大林太良の考古学・日本古代史研究」『人類学研究所研究論集（人類学・考古学に於ける「大きな理論」と「現場の理論」』宮脇千絵・藤川美代子（編）、12:74-81
2023b『環太平洋の原初舟－出ユーラシア人類史学への序章（南山大学人類学研究所モノグラフ・シリーズ 2022 年度第 1 号)』南山大学人類学研究所。
2023c「東西南北 海／天（あま）の人類学」『青淵』891:14-16。
後藤明（編）
2022 『大林太良 人類史の再構成をめざして』アーツアンドクラフツ。
後藤明・大西秀之（編）
2022 『モノ・コト・コトバの人類史－総合人類学の探究』雄山閣。
篠遠喜彦
1994 『楽園考古学』平凡社。
篠遠喜彦・荒俣宏
2003 『南海文明グランドクルーズ：南太平洋は古代史の謎を秘める』平凡社。
人類学講座編纂委員会（編）
1977 『人類学講座 12 巻 生態』雄山閣。(2017 『人類学講座新装版 12 巻 生態』雄山閣。)
杉田繁治
1990 「序論 ： 資料と方法 ： コンピュータによる文化クラスターの分析」『国立民族学博物館研究報告書』11:14-24。
角南聡一郎

2023 「大林太良の物質文化研究―その動機と背景の検討―」『人類学研究所研究論集（人類学・考古学における「大きな理論」と「現場の理論」）』宮脇千絵、藤川美代子（編）、12:57-73。

ダイアモンド、ジャレド

2000 『銃・病原菌・鉄： 一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎（上・下）』倉骨彰（訳）、草思社。

NPO 法人沖縄伝承話資料センター（編）

2006 『追悼　遠藤庄治―沖縄の伝承話研究と教育に捧げた生涯―』NPO 法人沖縄伝承話資料センター。

ビオストーリー編集委員会（編）

2007 『特集 知の巨人，大林太良の世界 神話の道 生き物たちの宇宙（生き物文化誌 BIOSTORY　vol.8 人と自然の新しい物語）』生き物文化誌学会。

山田仁史

2020 「東南アジア古層の神話・世界観と竹利用」『パレオアジア文化史学：アジア新人文化形成プロセスの総合研究』野林厚志（編）、pp.29-34。

ユヴァル・ノア・ハラリ

2017 『サピエンス全史』柴田裕之（訳）、河出書房新社。

ラッツェル，フリードリヒ

2008 『アジア学叢書 アジア民族誌』大空社。

渡辺仁

1977 「アイヌの生態系」『生態』人類学講座編纂委員会（編）、pp.387-405、雄山閣。

1978 「狩猟採集民の食性の分類:進化的、生態学的見地から」『民族學研究』43（2）:111-137。

1988 「北太平洋沿岸文化圏ー狩猟採集民からの視点ー」『国立民族学博物館研究報告』13(2):297-356。

1985 『ヒトはなぜ立ち上がったか―生態学的仮説と展望』東京大学出版会。

1990 『縄文式階層化社会』六興出版。（2000『縄文式階層化社会（新装版）』六一書房。）

1993 「土俗考古学の勧め：考古学者の戦略的手段として」『古代文化』45(11):1-14。

（英語文献）

Chapple, Eliot Dismore and Coon, Carleton Stevens

1942 *Principle of Anthropology*. H. Holt and Company.

Emory, Kenneth P. (et al)

1959 *Hawaiian Archaeology-Fishhooks.* Bishop Museum Press.

Forde, C. Daryll

1934 *Habitat, Economy and Society.* Methuen.

Fred M. Reinman

1967 *Fishing: An Aspect of oceanic economy: An Archaeological.* Fieldiana Anthropology 56(2):95-208.

Graeber, David

2018 *Bullshit Jobs.* Allen Lane.

Graeber, David and Wengrow, David

2021 *The Dawn of Everything: A New History of Humanity.* Allen Lane.

Lee, Richard Borshay & DeVore, Irven

1968 *Man The Hunter.* Routledge.

Osgood, Cornelius.

1970 *Ingalik Material Culture.* HRAF.

Ratzel, Friedrich

1894 *Völkerkunde.* Leipzig:Bibliographisches Institue.

1895 *Völkerkunde2.* Leipzig:Bibliographisches Institue.

Scott, James C.

2017 *Against the Grain.* Yale University Press.

Sinoto, Yosihiko

2016 *Curve of the Hook.* Univ. of Hawaii Press.

Watanabe, Hitoshi

1972 *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure.* Univ. of Washington.

1975 *Bow and Arrow Census in a West Papuan Lowland Community: a New Field for Functional-Ecological Study.* University of Queensland.

講演者紹介 （収録順／シンポジウム開催時点）

渡部森哉（南山大学・教授/人類学研究所・所長）

後藤明（南山大学・教授/人類学研究所・第二種研究所員）

大西秀之（同志社女子大学・教授）

角南聡一郎（神奈川大学・准教授）

石村智（東京文化財研究所・無形文化遺産部・部長）

本講演録の内容は、南山大学人類学研究所ウェブ・サイトにカラーで公開されています。ウェブ・サイトからはPDFでダウンロードしていただけます。

人類学研究所：http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/

じんるいけんBooklet vol.9

南山大学人類学研究所
公開シンポジウム
（後藤明教授退職記念）講演録

後藤明の研究の歩みと四人の巨人

発行日	2023 年 12 月 20 日
編　集	南山大学人類学研究所
編集責任者	宮脇 千絵
編集補助	古澤 夏子
発　行	南山大学人類学研究所 〒 466-8673　名古屋市昭和区山里町 18 電話　（052）832-3111（代表） 代表者　渡部 森哉
E-mail	ai-nu@ic.nanzan-u.ac.jp
Website	http://www.ci.nanzan-u.ac.jp/JINRUIKEN/
デザイン	株式会社サウザンドデザイン
印刷・製本	株式会社ウエルオン
装丁	古澤 夏子
ISSN	2434-9658

南山大学人類学研究所
Anthropological Institute, Nanzan University

Lecturer

渡部森哉（南山大学・教授/人類学研究所・所長）
挨拶・趣旨説明

後藤明（南山大学・教授/人類学研究所・第二種研究所員）
講演１　学問上の四人の「巨人」

大西秀之（同志社女子大学・教授）
講演２　北方研究の立場から
－日本人類学にとっての北方研究－

角南聡一郎（神奈川大学・准教授）
講演３　物質文化研究の立場から

石村智（東京文化財研究所・無形文化遺産部・部長）
講演４　オセアニア考古学の立場から
－世界遺産「タプタプアテア」と篠遠喜彦－